

第45回「城戸賞」応募作品

まつり

○ 「まつり」 あらすじ

夏。東京。大学生5人組が、覚せい剤密売の現場を襲撃する。やくざとアメリカ人を殺し、金を奪って逃走。海外へ逃亡する計画は失敗。

一行は太平洋沖に浮かぶ無人島へ逃げ込む。

島には老人たちだけがひっそりと住んでおり、学生たちを歓迎した。ここなら警察の追跡を逃れることができる。安全を確信した学生たちは、村で行われる祭りを楽しむことに。

老人たちは昔話に登場するような気のいい人たちだったが、奇妙なところもあった。昭和初期で時代が止まったような生活をしており、村の奥には違法なはずのケシ畑もあった。

宵祭りの日。お囃子や能を舞う老人たち。学生たちは、酒に酔いしれ、祭りを楽しんだ。そこへ、金を奪い返しに現れたやくざが邪魔をする。暴力的なやくざたちに学生たちは立ち向かう術がなかった。だが、祭りを邪魔されて怒った老人たちは、やくざをあつかりと殺してしまった。老人たちは、異常を察した学生たちは逃げ出すとするが、老人たちに捕まってしまう。

いよいよ本祭りが始まった。若者たちは御神体に生贄に捧げられることになる。一人、また一人と殺されていく中、逮捕に迫って来た刑事たちが現れる。助かったと思いきや、刑事たちもまた、あつかりと老人たちの手に落ちるのだった。

祭りは最高潮へ達する。最早、絶体絶命のそのとき、島が空爆を受ける。学生たちが殺したアメリカ人は軍人だった。復讐に燃える米兵たちが突入。発狂した老人たちは、これぞ祭りとはかりに嬉々として応戦。第二次太平洋戦争と化した島を、ただ一人だけ逃げのびる。老人たちは全滅し、祭りも終わった。

事件も忘れられたかに思われた秋。首相官邸へ一つの贈り物が届けられた。老人たちが崇拝していた御神体である。新たな祭りが始まるうとしていた。

○ 「まつり」 登場人物表

たちばなもとき		
橘 基紀	(19)	邦和大学2年生
あさいやすし		
浅井泰士	(19)	邦和大学2年生
くぼまさと		
久保正人	(19)	邦和大学2年生
おがわみく		
小川未来	(19)	邦和大学2年生
きのしたさや		
木下紗矢	(19)	邦和大学2年生
加上島の老人たち		
加藤シゲ		その妻
長尾 トク		その妻
浜本 ヒデ		その妻
高見 ノブ		その妻
岩谷 マツ		その妻
ふみ		その妻
にしぎきこうすけ		
西崎 孝介	(52)	警視庁の刑事
まえのいくみ		
前野 郁美	(34)	警視庁の刑事
たどころりゅうへい		
田所 隆平	(58)	解体屋の社長
ひやまみつる		
檜山 充	(27)	南部組のやくざ
しんじょうよういち		
新城 洋一	(46)	南部組のやくざ
なんぶひょうご		
南部 兵吾	(65)	南部組組長
こしろひろよし		
古代 大善	(73)	永楽寺の住職
まつくすごーるどまん		

令官

マックス・ゴールドマン（41）在日米軍司  
ほうじょうかずま  
北条和馬（62）  
総理大臣

○ 夏

○ 加上村（かがみむら）

太陽が西に傾いている。

昭和初期のような田園風景。

田の横にある水路で農作業の道具の泥を

洗い流している着物の老婆（さち）。

薪を背負った同じく着物の老人（シゲ）

が通りかかる。

シゲ「今日も暑いのに」

さち「ほんに、ほんに」

シゲ「さちの近くに腰を下ろし、きせる

を取り出す。

缶から出した刻みたばこをきせるに詰め、

火打ち石で火をつける。

一服吸うと、さちに勧める。

さち、会釈してからきせるを預かり、一

服。ふう、と煙を吐くと、会釈してきせるを

返す。

シゲ「もうすぐ祭りじゃ」

さち「ほんに、ほんに」

シゲ「お供えの用意をせんと」

さち「ほんに、ほんに」

シゲ「そろそろ来そうなもんじゃがの」

さち「ほんに、ほんに」

シゲ「最近は難しうなったの」

さち「ほんに、ほんに」

シゲ「困りもんじゃやて」

さち、水路の底を探り、竹細工の罾を取

り出す。

中には大きなどじょうがごっそり。

シゲ「こりや、立派などじょうじゃ」

さち「ほんに、ほんに」

シゲ「御神体様のおかげじゃ」

シゲ、竹やぶの奥を覗くようにして、両

手を合わせて拝む。

シゲ「ありがたや、ありがたや」

さちも続いて拝む。

薄暗い竹やぶが、答えるように風でざわ

ざわと音を立てる。

○ タイトル 「まつり」

○ 東京 夜

○ 神社

祭囃子が聞こえる。  
ずらりと並ぶ屋台。  
浴衣姿の恋人たちや子供連れの夫婦など、  
夏祭りでにぎわっている。  
その中に、顔にお面をかぶった5人組。  
鬼のお面は基紀（19）。  
天狗のお面は泰士（19）。  
ひよつとこのお面は正人（19）。  
きつねのお面は未来（19）。  
おかめのお面は紗矢（19）。  
祭囃子で踊りながら神社の外へ出て行く。

○ 交番の前

中で書類仕事をしている警官（頼本）。  
外から未来がきつねの鳴き声を真似る。

未来 「こーん、こん」

警官が顔を上げると、お面をつけた未来。  
警官、眉をひそめる。

ノーブラの未来、Tシャツを両腕でまく  
り上げる。

警官、すけべ丸出しの顔。

未来 「こーん、こん」

と、鳴きながら立ち去る。

警官、未来を追う。

出て来た警官を、お面をつけた4人が後  
ろから角材で殴りつける。

気を失って倒れる警官。

未来が戻ってきて、倒れた警官を蹴りつ  
ける。

紗矢に顔を向ける基紀たち。

紗矢、角材で警官の股間を叩きつける。

ひよつとこの正人が警官から拳銃を奪い  
取る。

手慣れた手つきで弾倉の銃弾を確認。  
5人、祭囃子が聞こえているように踊りながら去って行く。

○

埠頭

コンテナの山。

いかにもという感じの車にやくざが二人。

待たされてイラついている中郷と市原。

カーテレビでニュースが流れている。

当選し、万歳三唱している選挙関係者の

映像にアノウンサーの声。

「今日、民自党総裁選で前評判を覆して

選出された北条和馬元幹事務長が……」

中郷、チャンネルを変える。

サッカー中継。

日の丸の鉢巻で応援する観客たち。

忌々しげにテレビを切る中郷。

のろのろとアメ車がやって来て、停車。

乗っているのは、白人と黒人のアメリカ

人。

中郷、イラだちを殺して、ルームミラー

で作り返顔を練習してから、外へ。

トランクからスーツケースを取り出し、

アメ車の前へ。

白人、流暢な日本語で、

白人「早かったな。俺たちのほうが先だと思

っていたよ」

市原「約束は2時間前だ」

白人、英語で黒人とひそひそと話してか

ら日本語で、

白人「そんなはずはない。俺たちは時間通り

だ。約束は破らない」

市原「どうだかな。いつも約束を破るのはそ

っちだろうが」

黒人「(英語で)日本人は嘘つきだ」

市原「なんだって？おまえ、今、悪口言った

だろ。英語わからないからってバカにすん

なよ。顔見りやわかるんだぞ」

中郷、市原の頭をぴしゃりと叩き、

中郷「きやんきやん吠えるんじゃないよ。お

まえは犬か」

市原「でも、アニキ」

中郷「こちらさんには勝てないんだ。さつきと引き上げて飲みに行くぞ」

市原、渋々スーツケースを白人に渡す。

白人、中を確認する。

白人「日本の札束がぎっしり。

白人「どういうことだ？5000万しかないじゃないか。1億って話だろ」

中郷「バカ言うなよ。1キロのシヤブにどこかのバカが1億も出すって言うんだよ。相場だろうが」

白人、また英語で黒人とひそひそ話。

中郷「まったく。おまえらはいつもそうやって自分の好きなように相場を動かそうとする」

白人「仕方ない。今回はこれで手を打とう」

中郷「これつきりにしたいところだけど、あんたらと手を切るわけにもいかねえからな。でも、この次は俺は来ないからな。そのツラ見るのはゴメンだ」

白人「寂しいことを言わないでくれよ。でも、まあ、そうなるだろうな」

中郷「どういうことだ？」

白人が左手を上にかざす。

その直後、音もなく銃弾が中郷の頭を撃ち抜く。

市原「：さつきは言いすぎた：勘弁してくれよ：」

市原、両膝をついて命乞い。

黒人、市原に小便をかける。

市原、耐えている。

市原の頭も同様に撃ち抜かれる。

白人が、コンテナの山を見て微笑む。

○

コンテナの山の上  
ヒスパニック系のアメリカ人が狙撃銃を  
片付けようとしていると、きつねのお面  
をつけた未来が現れる。  
驚いたアメリカ人、慌てて狙撃銃を構え



ようとする。  
その後ろから、おかめのお面をつけた紗  
矢がバットで頭を殴りつける。  
失神するアメリカ人。  
未来、狙撃銃を手に取り、アメリカ人を  
撃つ。  
音も無く銃弾が体に穴を空ける。  
未来「こーん、こん」

○ 埠頭

白人と黒人がスーツケースをアメ車のト  
ランクに入れようとしている。  
鬼と天狗とひよつとこのお面を付けた基  
紀たち3人が現れる。

驚いた白人と黒人、たじろぐ。

正人、警察の拳銃を向け、流暢な英語で、

正人「それを渡していただけますか？曹長」

白人「おまえ、なぜ知っているの？」

正人「情報を握っているのは、あなたたちばかりじゃないんですよ」

黒人が拳銃を抜こうとする。

すかさず正人、黒人の頭を撃ち抜く。

基紀が黒人の拳銃を奪い、白人のこめか

みに突きつける。

白人、首を横に振ってみせ、

白人「従うしかないようだな」

左手を上にかざす。

銃弾が3人を片付けると思いきや、なに

も起きない。

白人が困惑していると、狙撃銃を手にし

た未来と紗矢が歩いて来る。

お面をつけた5人に囲まれる白人。

5人、お面をとる。

白人「おまえら、こんな真似をしてどうなる

かわかってるんだろうな」

基紀「(英語で)ええ。覚悟のうえですよ」

白人「忘れていたよ：日本人はやっぱりクレ

イジーだ」

泰士「(英語で)俺たちは好きなんですよ。マ

ツリ(ここだけ日本語)が」

白人「マツリ？ そうだな。日本人は好きだよ。ハナビ（日本語）にマツリ：」  
基紀「そう。マツリにはいい季節です」  
基紀、白人の眉間を撃ち抜く。

○ 加上神社

焚き木が炎をあげている。  
簡素な社殿の右手に大きな御神木。  
左手には大人が楽に横たわれるほどの大きな一枚岩。  
御神木の前には、いくつもの水晶が固まってできた御神体が飾られている。  
シゲたち村人全員（10人）が御神体を前に正座して拜んでいる。  
全員、昔話に出てくるような着物姿。  
きくがしゃんしゃんと巫女鈴を鳴らす。

○ 東京

○ 繁華街

地下鉄の出入り口から喪服姿の西崎（52）が現れる。  
道路ぎわに添えられた花束の前を通り過ぎる。  
すぐに折り返し、花束を拾う。  
しおれた花びらを二、三ちぎり、体裁を整える。  
郁美（34）が運転する覆面パトカーがやってくる。助手席に乗り込む。  
パトカー、走って行く。

○

パトカーの中  
郁美、ムスッと運転している。  
西崎、花束をちらつかせ、  
西崎「コレ、お祝い。誕生日の」  
郁美「ありがと」  
西崎「喜んでもらえて嬉しいよ」  
郁美「先月だけ」  
西崎「そうだったけ？ ごめん、ごめん」  
西崎、窓を開けて花束を捨てる。

郁美「ファーストフードのドライブスルーに車を入れる。飯、済ませたから」  
西崎「俺、いらないよ。飯、済ませたから」  
郁美「あたしが食べるの」

○ パトカーの中間経過

西崎が運転している。  
郁美はハンバーガーとポテトをむさぼり食っている。

西崎「よく食うな。二人分あるじゃないか」  
郁美「食べなきゃ、やっつけられないから」

西崎「墮ろしたたんだよな？」  
郁美「ううん。やめた」

西崎「嘘。墮ろしたわよ」  
西崎「脅かすなよな。一回こっきりの関係で

そこまで責任背負わせないでくれよ」  
郁美「何回の関係なら責任を背負えるの？」

西崎「まあ、そりゃ二桁はいかないと……」  
郁美「(笑って) 大した人生設計ですこと……」

西崎「(苦笑) だよな。ホントに……」  
郁美「食べる？」

西崎「ポテトを一本つまみ、口へ。」  
西崎「塩、薄くないか？」

郁美「でしょ。かけ忘れてるんじゃない」  
西崎「ポテトを探る。」

清め塩を取り出し、ポテトにかける。  
郁美「ちよつと、やめてよ。それ、お清めの

塩でしょ。気持ち悪い」  
西崎「(食べて) うまい。イケる」

郁美「全部、食べなさいよ。あげる」  
西崎「食べないの？ バカだな。死ぬほどうま

いのに」  
郁美「葬式帰りによくそんな口がきけるわね。

奥さんのお父さん、化けて出るわよ」  
西崎「出てきたら、こつちが恨みごとを言っ

てやるよ。介護にどれだけ金使ったか……」  
郁美「あんた、ロクな死に方しないわよ」

西崎「知ってるよ」

○

埠頭

中郷たちの遺体を前に他の警察関係者と

現場検証をする西崎と郁美。

アメ車はなくなっている。

郁美は周囲の手前、敬語で話す。

西崎「あ、こいつ南部組の中郷だ。若いやつ

も見たことある気がするな」

郁美「二人はあるがこのコンテナの上から狙撃

されたみたいですよ。コンテナの上にも外国

人の男の死体がありました」

西崎「この不良外人は？刺青からすると、兵

隊か？」

郁美「アメリカの軍人です。大使からの要請

で、マスコミには観光客ということ報道

させているようです」

西崎「おもてなしってやつか。日本人はいつ

まで芸者扱いされて喜んでりやいんだ？」

郁美「仕方ないですよ。負けたんですから、

戦争に占領されたままなんですよ」

西崎「戦争は終わっちゃいねえってことか」

郁美「鑑識によると、足跡から事件発生時、

ガイ者以外に5人居合わせていたそうです」

西崎「で、この黒人を撃った弾が警官から奪

った銃の弾と一致したわけか」

郁美「はい。病院に運ばれていたその警官で

すが、さっき死んだそうです」

西崎「それがいい。本人も署の人間もメンツ

が立つてもいい」

郁美「立つといえ、警官、勃起したまま硬

直して死んだそうですよ」

西崎「羨ましい。男の夢だな」

郁美「戦争がなくならないわけですね」

西崎「どういふことだ？」

郁美「メンツとあそこが立つことしか頭にな

い生き物が世の中を動かす限りは、この世

から暴力は消えないってことですよ」

西崎「女だって暴力をふるうだろうが」

郁美「そりゃそうですが、男が先ですよ」

西崎「どつちが先つてもんじゃないだろ。ま、

今の世の中、歯止めが効かなくなってます

郁美「犯人も歯止めが効かなくなっていることだけは確かだろうな」  
西崎「可能性もありますからね。まだ弾は残っていないか？」  
西崎「犯人の目星はついてるのか？」  
郁美「目撃者によると、天狗とか鬼とか」  
西崎「妖怪かよ。いくら夏でもそれはないだろ。ゲゲゲの鬼太郎じゃないんだからな」  
郁美「（呆れて）お面ですよ。お面」  
西崎「それ、先に言えつての。ま、とりあえずは兵隊さんが乗ってきた車からたどるしかないな」  
郁美「車ですか？」  
西崎「そこ、タイヤのあとが残ってるだろ。幅からしてアメ車だ」  
郁美「（改めて見直し）なるほど」  
西崎「これをたどれば追いつくさ。人間てのは、きれいに生きてるように思えてもなにかとあとを残すもんだ。ま、相手が人間だったらの話だけだな」  
西崎と郁美、闇に伸びているタイヤ痕を見つめる。

○ 自動車解体業 田所商会  
廃車の山。  
事務所の前にアメ車が止まっている。

○ 田所商会 事務所  
壁に貼られた日章旗。  
田所「橋くん、なんだよあの車は。困るよ。アシがつくだろ」  
基紀「社長、喜ぶかと思って。高く売れるでしよ」  
田所「そりやそうだけどねえ……」  
基紀「いらぬなら乗っていきますよ」  
田所「もうよ。もう。でも、いやあ、困ったなあ……」  
基紀「困ったのはこっちですよ」  
田所「困った？なにが？」

基紀「薬はないわ、金は少ないわ。聞いてた話とちがうじゃないですか」  
田所「世の中そんなもんだよ。社会勉強つてやつだ。大学じゃ教えてくれないだろ」  
基紀「それにしちや授業料が高くないだろ」  
田所「若いうちの苦勞は買ってでもつてこと」  
基紀「(失笑)それ昭和ですよ。今、なんの時代かわかってます？」  
田所「同じだよ。名前が変わろうとね」  
田所「田所、スーツケースを開け、中から百万円の札束をごっそりとかむ」  
基紀「社長、半分戻してよ。約束は一割」  
田所「そうだったけ？すまん、すまん。ハハハ」  
田所「金庫からパスポートを5つ出して基紀に渡す。」

○ 高速道路

基紀が運転するワゴン車が走っている。

○ 基紀の車の中

未来「なにこれ？私、ベトナム人になってる！ミン・イーだって」  
泰士「俺、リー・チャオだよ。中国人だ」  
紗矢「私は韓国人。ユン・ソンヒ」  
正人「俺なんてロシア人だよ。ビクトル・セルゲイ。こんなパスポート使えるのかよ」  
基紀「心配するな。なにが日本人かなんて、誰もわかりやしないんだから」  
泰士「外国で暮らすんだ。日本人かどうかなんて、もうどうでもいいだろ」  
正人「それもそうだな」  
未来「紗矢、私のと交換してよ。韓国人のほうがかわいい」  
紗矢「嫌よ。私、気に入ってるんだから」  
基紀「未来、バカ言うなよ。カードじゃないんだ」  
紗矢「未来、スネてきつねのお面をかぶる。」  
紗矢「あ、ベトナムにもきつねがいるんだ」

未来「うるさい」  
夜が明けていく。声をあげて笑う。

○ 空港

警察が嚴重な検問を敷いている。  
離れたところに停車している基紀の車。  
車を反転させ、去って行く。

○ 基紀の車の中

車が進む中、重い沈黙が続く。

泰士「うまくいかねえもんだな」  
未来「ね、バチが当たったんじゃない。人、殺しちゃったし」

正人「おまえ、他人事みたいによく言えるな」  
未来「だって、事実じゃない」

基紀「でも、いい気持ちじゃなかったろ」  
未来「お面をかぶる。」

基紀「戦争だと思えばいいさ」  
泰士「よくわかかんねえよな。戦争じゃ、人殺

したら褒められるんだよな。みんなよくや  
ってたよな。学徒出陣とか」

正人「ガクトってタレントの？」  
未来「学生よ。学生の兵隊さん」

正人「ガクトって学生なの？」  
未来「バカ」

泰士「笑いの起きる空気ではない。  
未来「解散するか？」

未来「どういことを？解散って？」  
泰士「日本を出よう」

基紀「それがいい。金を山分けして、別々に  
正人「その方が捕まる確率は低くなる」

正人「その方が捕まる確率は低くなる」  
泰士「どこかで落ちあえばいい」

未来「いやよ！一緒にいようよ！」  
正人「そうだ。未来の言う通りだよ。一緒に  
行動するって決めたじゃないか」

基紀「しばらく沈黙。決めたよな」

泰士「ああ。そうだった」  
未来「やった！みんな一緒ね」

紗矢「じゃ、どこへ行く？」

基紀「太陽を見て、  
「とりあえずあれを追ってみるか」  
「いいね。太陽が出ている限り明るいわ」

正人「今は暗いのはごめんだからな」  
紗矢「ミン・イーもそれでいいでしょ」

未来「またそれ言う」  
未来「ムクれる未来を笑う4人。」

未来「ま、いつか」  
未来「お面をつけて踊り出す。  
基紀たちもお面をつけて体を揺らす。」

○ 都内のビル群

○ 南部組

○ 南部組の組長の部屋  
壁に貼られた日章旗。

組長の南部（65）から檜山（27）たち幹部連が話を聞いている。

○ 南部組の事務所

新城（46）が電話をしている。  
新城「：そう、俺：久しぶり：どう？ばあち

やん、一人で寂しくない？：え？ちがうよ  
：オレオレ詐欺なんかじゃないって：あ！  
切らないで！：ネ！ばあちゃん！

新城「電話口からは切れた音。」

新城「クソババア！」  
新城「リストを見て、次の番号にかける。  
組長の部屋から幹部連が退室。」

新城「あ？おじいちゃん？俺だけど：」  
檜山「（背を向けて）新城、車！」

新城「：そう俺、新城：あ！やべ！」  
慌てて電話を切る新城。

新城「出て行った檜山を追う。」



○ 檜山の車の中  
新城が運転している。

檜山「新城！」

新城「ハイ！」

檜山「あ、いや、ちよつと難しいかと」

新城「おまえ、おっさんなんだからさ。それ  
らしく電話しろよ。学生みたいなノリでか  
けて信用するわけないだろ」

檜山「頭使えよな。どうしてどいつもこいつ  
も頭悪いんだろな。警察は中郷が殺された  
件、抗争がらみか組内の揉めごとだって線  
で捜査してるらしいぜ」

新城「よくわからないがハハ。バカですわね」

檜山「組長は組長で、中郷を殺つたやつ始末  
して、金を取り返してこいつてよ。どこの  
どいつが手汚した金、そっくり渡すんだよ」

新城「え？組長に渡さないんですか？」

檜山「おまえは運転に集中してろ」

新城「はい」

檜山「檜山のスマホに着信、電話に出る。」

檜山「はい」

○ 交差点

檜山の車の向かいに基紀の車。

その前を西崎と郁美の車が通り過ぎる。

西崎たちの車とすれ違う一台の外車。

後部座席に乗っているのは、制服姿の米

軍司令官、マックス・ゴールドマン（4

1）。

青信号になり、檜山の車と基紀の車がす

れ違う。監視カメラが4台の車をとらえている。

監視カメラの映像

○

監視カメラの映像  
車の中に映っている基紀たち5人の顔までしっ  
かりと映っている。

○ 田所商会  
アメ車の前に田所と檜山と新城。

田所「中郷さん、残念でしたね」

檜山「社長、あんた中郷にいくら借金してた？」

田所「そんなもんありませんよ」

檜山「あんたも役者だね。腹が読めねえ。いくつ面持ってるんだ？」

田所「勘弁してくださいよ。協力しようとしてるんだから」

檜山「中郷殺ったやつ、本当に知ってるんだろ？」

田所「ええ。ですから」

檜山「わかった。博打の負け分、全部チャラにしてやるよ」

田所「ありがとうございます。檜山さん、いい人だ」

檜山「俺は頭もいいけど、心もいいんだぜ」

○ 南部組 組長の部屋  
若い衆が白湯と胃薬を運んで来る。

南部「組長、薬を飲んで、テレビをつけるよ。あいつに内々で作らせた偽札を薬

若頭「買ったけに使うんだからよ」

南部「よかったんじやないですか？」

若頭「よかつたんじやないですか？」

南部「よかつたんじやないですか？」

若頭「よかつたんじやないですか？」

○ 田所商会  
アメ車にポリタンクでガソリンをかけて

事務所から銃声。

○ 田所商会の事務所  
扉が開いたままの金庫。

床の上には頭を撃ち抜かれた田所の死体。  
拳銃を手にした新城が顔に返り血をあび  
ている。  
拭くものを探すが見当たらない。  
壁の日章旗を取り、タオル代わりに拭く。

○ 田所商会

檜山がガソリンをかけ終わり、ポリタン  
クを放り投げる。  
新城が事務所を出て来る。

檜山 「殺ったか？」

新城 「はい：アニキ、なにやってんです？」

檜山 「燃やすんだよ」

新城 「もったいない。高く売れるのに」

檜山 「俺はアメ車が嫌いなんだよ」

檜山 「俺は財布から千円札を取り出し、ライ

ターで火をつける。

アメ車の手前に放り、車に乗り込む。

炎がアメ車に伸びていく。

新城、車を出す。

アメ車、爆発炎上。

檜山、恍惚とした顔。

檜山 「ファツキンUSA！」

○ 高速

基紀の車が西へと走っている。  
海が見える。

○ 基紀の車の中

未来 「あ、海」

紗矢 「ね、行ってみない？」

泰士 「そうだな。ケツも痛くなってきた」

正人 「腹も減ったしな。うまいもん、食べる

基紀 「じゃない？」

基紀 「そうするか」

○ 高速の車が降りて行く。

○ 山の中、基紀の車、のろのろと走っている。

○ 基紀の車の中  
未来「どうしたの？迷った？」

基紀「おかしいな？ナビがおかしいみたい」  
泰士「それ、社長が付けてくれたやつだろ？」

正人「最初から壊れてたんじゃない？」  
紗矢「ね、あそこになにかあるわよ」

○ 永楽寺の門前  
車から基紀たちが降り、寺の中へ。

○ 永楽寺墓地  
お供え物のお菓子や飲み物。

正人「あんな、バチが当たるとさ、腐らせて捨てるほうがバチ当たりだよ。腐ら

紗矢「呆れて他の3人を見る。」  
基紀「たちも気にせずむさぼり食っている。」  
それなら、と自分も果物にかじりつく。

○ 永楽寺境内  
山の下に広がる海。

満腹感でくつろぐ5人。  
境内に飾ってある古い屏風絵。

壇ノ浦の戦いの絵。  
舟に乗った幼い子供が大きな結晶の塊を抱えている。

加えて、御神体によく似ている。  
筆で説明書きがあるが、読めない。

未来「このお侍さん、基紀に似てない？」  
基紀「どこがだよ」

正人「こっちの女の人、未来と紗矢にそっくりだ？」

紗矢「ね、というより、この人たち全員、私たちに似てない？」

泰士「バカバカしい。そんなはずないだろ」

沖にある小さな島が基紀の目にとまる。

突然、後ろから声がする。

古代「あんた、あの島が見えるのか」

5人が振り返ると、住職の古代（73）が立っている。

基紀が言葉に詰まっていると、

古代「あの島が見えるのか、と聞いておるんだ」

基紀「ええ。道の間違えとるようじゃな」

古代「あんたら、道を間違えとるようじゃな」

基紀「ええ。ナビが壊れたみたいで」

古代「……」

基紀「すいません：あの……」

古代「わかっとなる。墓前の物を喰らうとは、餓鬼そのものじゃわい」

古代、両手を合わせてぶつぶつと唱える。

基紀「金なら払いますよ」

古代「結構。それよりも、これを……」

袈裟の裾からおふだを取り出す。

墨でなにやら書き綴っている。

基紀「なるほどね。それを買えばいいんだ」

古代「金などいらん。とっておきなさい」

基紀、首を傾げながらおふだを受け取る。

基紀「さっき、あの島が見えるのか？って聞いたけど、あれがなにか？」

古代「なんでもない。あれは加上島といつてな。無人島じゃ」

未来「無人島って、人が住んでないの？」

古代「そうだ。人間はおらん。だから立ち入ってはならんのだ」

基紀、加上島を見て考えを巡らせている。

泰士「和尚さん、あそこの絵、なんですか？」

古代「あれは安徳天皇じゃ」

未来「安徳天皇って、壇ノ浦の戦いで死んじゃった子どもでしょ」

正人「未来、よく知ってるな。講義でやってたのか？」  
未来「これ、中学の歴史レベル」  
紗矢「あんた、それでよくうちの大学に入れたわね。裏口？」  
正人「俺は過去にはこだわらない主義なの」  
古代「過去からは逃れられん。己のやったこともな」  
5人、気まづくなつてだんまり。  
古代「安徳天皇はそこに描かれている石を抱え、お付きの者たちとともに海にその身を捧げたということじゃ」  
紗矢「おかしくない？安徳天皇が持っていたのつて、三種の神器でしょ。刀とか鏡とか」  
古代「このあたりでは、その絵の通り、石を抱えていたということになつとる」  
泰士「あの石つてなに？」  
古代「あれはかがみ石。神の力をもつ石じゃ」  
基紀「神の力？」  
古代「そう。そもそも平家が絶大な権力を手に入れたのは、あの石のおかげじゃった。源氏はあれを奪おうとして、戦争になつたのじゃよ」  
泰士「源平の戦争のきつかけ？」  
未来「そんなの教科書になかつたけど」  
古代「歴史とはそういうものじゃ」  
泰士と未来、眉唾ものだと顔を見合わせる。  
古代「この話は続きがあつてな……」  
基紀「続き？」  
古代「……いや、話しても無駄というものか……」  
未来「もつたいぶらないで話してよ」  
古代「……ゆっくり休んでいきなさい。ただし、あの島のことは忘れなさい。では」  
古代、会釈してから本堂へ歩いて行く。

○ 山道

基紀の車が走っている。

○ 基紀の車の中

カーテレビでニュースが流れている。「襲撃されて死亡した頼本巡査の通夜を前に、容疑者を特定中と警察発表がありました。頼本巡査の遺族は……」

5 泰士「頼本、重い空気になっている。」

紗矢「みんな、ごめんね……」

泰士「謝るなよ」

未来「紗矢は悪くない」

正人「みんな、決めてたことじゃない」

基紀「そう、そう」

紗矢「こみあげる涙を見せまいと、窓の外を向く。」

未来「お前の下から涙がったう。」

泰士「空気を変えようと、」

基紀「行こうぜ。あの島に」

紗矢「島って、ひよつとして加上島？」

基紀「そう」

未来「面白そう」

正人「やばいんじゃない？入ったらダメだつて和尚さん、言ってたじゃない」

未来「正人、怖いのか？」

正人「そんなんじゃないねえよ」

紗矢「いいじゃない。人がいないなら、今の私たちにはちやうどいいわ」

泰士「そうだな。ほとぼりが冷めるまで、あそこ、ゆっくりしよう」

他の4人「決定！」

○ 港

港の人はない。漁船が並んでいる。車から食料や飲み物が入ったクーラーボックスを一隻の漁船に運び込む正人と未来。

○ 漁船の操縦室

紗矢がいじってエンジンをかけようとしている。

泰士「紗矢、本当に船の運転できるのかよ」  
紗矢「簡単、簡単。子どもの頃、お父さんが

やってるの見たから」

泰士「紗矢、親父いるんだな。いいな」

紗矢「いたのよ。昔の話」

泰士「あ、ごめん」

泰士、バツが悪くなる。

エンジンがかかる。

泰士「かかった！」

紗矢「（にっこり笑って）ほらね」

○ 港

基紀たちが乗った漁船が沖へ出て行く。

○ 永楽寺の境内

加上島へ突き進む漁船を眺めている古代。

ふん、とため息を吐き、

古代「これが業というものか。やむなし……」

古代、両手を合わせてぶつぶつと唱える。

○ 加上島 周辺

基紀たちの漁船がゆっくりと旋回する。

○ 漁船のデッキ

島を見上げる5人。

基紀「近くにまで来てみると、結構デカいな」

正人「豆粒みたいに小さく見えたのにな」

船が停泊できる場所が見当たらない。

岩肌が荒れ、波も激しい。

泰士「この島、やっぱり入れないんじゃない？」

未来「港、ないじゃん」

正人「バカ。無人島だって言ったろ」

未来「あんたに言われると、すっごく傷つく」

基紀「やめとくか？島に入るなってことかも

しれないしな」

泰士「せっかくここまで来たんだぜ。今更引

き返すって手はないだろ」

紗矢「裏に回ればなんとかなるんじゃない？」



行ってみようよ」  
紗矢、操縦室へ。

○ 加上島 周辺  
漁船、島に沿って進んで行く。

○ 漁船のデッキ  
ちようど裏に回ったあたりに、砂浜が見える。

基紀「紗矢、あそこはどうだ？」

紗矢「ギリギリまで島に近づけるから、あと

未 来「泳いでいくのかなさそうね」

正 人「バカにすんなよ。泳げるに決まってる

未 来「嘘言っちゃって。悲しいの」

正 人「嘘じゃねーっての」

○ 加上島 浅瀬  
停泊して波に揺られている漁船。

○ 漁船のデッキ  
基紀たちが海へ降りていく。

まず、最初に泰士。

そして、未来、紗矢。

正人が食料の入ったクーラーボックスを

降ろそうとしたところ、船底からもの

すごい衝撃音ともにもぐんと揺れる。

紗矢「船が斜めに沈み始めたのよ！早く降り

て！」

正人、慌てて海へ飛び込む。

基紀、札束の入ったスーツケースを抱え

○ 海

沈んでいく船を見ている5人。  
船首だけ海から突き出している。

未 来「あーあ」  
泰士「もう戻れないな」

衝撃で壊れたクーラーボックスから食料が海面へ  
正人、かき集めようとするも、方々へ流されていく。  
がつくりする正人。  
肩に手をかけて慰める未来。  
基紀「さ、行こう」  
基紀、スートケースを浮き代わりにして砂浜へ泳いで行く。  
4人、ついて行く。  
海面には5つのお面が漂っている。

○ 加上島

紗矢「陽が沈むと、ここも潮が満ちてくるわ」  
基紀「できるだけ高い場所に行ったほうが良さそうだな」  
正人「えー、まだ動くの？休もうよ」  
未来「しっかりしなよ、インターハイ」

○ 森の中

基紀たちが歩いている。  
泰士「変な島だな」  
紗矢「なにが？」  
泰士「ヤブ蚊もいない。普通、刺されるだろ」  
紗矢「それもそうね。そういや、虫も見ないわね」  
未来「気にすることないじゃない。刺されたいの？」  
泰士「そういうことじゃないよ」  
正人「俺も虫嫌いだから、ちようどいいよ」  
紗矢「あんたたちって、ほんと単純ね」  
未来「複雑に考えたからって、答えに行きつくわけでもないでしょ」  
泰士「虫がいないってことは、生物がいないってことじゃないか？そうなること、食料になるような生き物もないってことだぞ」  
正人「そりゃ困る」  
紗矢「安心しなさい。この世の中から。泰士、正人態系があるわけないんだから。」

泰士「脅しちゃダメでしょ」

紗矢「潮流が島の温度変化に影響を与えてい

泰士「ふうん、そうなんだ。偶然でしょ」

泰士「ただけのことあるね」

紗矢「雑学よ、雑学」

基紀「奥へと進む」

○ 竹やぶ

暗がりの中、基紀たちが進む。

先に光が射している。基紀たちが早くなる。

○ 加上神社

基紀「ここは？」

泰士「神社みたいだぞ」

未来「じゃ、無人島だぞ」

正人「じゃ、なにか他のものがあるんじゃないかな

正人「他のものってなんだよ」

未来「妖怪とか？神様とか？」

正人「そんなもんいるわけないだろ」

紗矢「かなり古い建物みたいだから、ずっと

昔、人がいたのよ、きつと」

正人「ずっと昔って？昭和とか？」

未来「あんたバカね。中世とかよ」

正人「中世って、ベルサイユ宮殿とかだろ。

マリー・アントワネットとか。俺だって知

ってるよ。日本にもあったんだ」

正人「あ、気にせず、一枚岩に横たわる。

正人「その岩、ひんやりして気持ちいいや」

基紀「普通の神社にこんなものないよね」

基紀「それ、正人の背の岩の表面を探り見る。

未来「ホントだ。人間の形してる」

正人「嘘ッ！」

正人「飛んで起き上がる。」

未来「このシミ、血じゃない？」

基紀「そうだな。血だ」

正人「ちよつと、やめてくれよ！」

正人、背中やお尻をバタバタと手で払う。

それを見て、基紀と未来、笑い出す。

正人「なんだ、脅かすなよ」

基紀「そんなはずないだろ」

未来「雨よ、雨」

泰士と紗矢は御神木を見物している。

紗矢、木を手で触れてみる。

紗矢「すごいわね。これ縄文杉？」

泰士「同じといえれば同じだけど、正確じゃな

い」

紗矢「どういうこと？」

泰士「縄文杉つてのは屋久島にある杉の木の

名前なんだよ」

紗矢「そうなんだ」

泰士「樹齢は同じぐらいだろうから、4千年

以上だろうな」

紗矢「4千才か。すごい」

泰士「でも、この地域にこれほどの木がある

なんてな」

紗矢「学術的にすごい発見じゃない？」

泰士「ああ。だと思っよ。どうなってるんだ？

無人島かと思いきや、こんな木まであるな

んて」

紗矢「この神社、いつからあるんだろうね？」

泰士「基紀たちがいる社殿の方へ。」

紗矢もあとをついていく。

後ろからかすかな女性の声がある。

「助けて！」

紗矢「！」

紗矢、驚いて振り返る。

そこには御神木しかない。

御神木の表面をじっくり見る。

苦悶している人間の顔に見える。

紗矢、気味が悪くなって、基紀たちのもとへ。

基紀「どうした？」

紗矢「なんでもない。大丈夫」

手持ちぶさたにしていた正人、拝殿の鈴緒をなにげに引っ張る。

正人「うわっ！」

がしやん、と鈴が上から落ちて来る。

未来「あーあ。あんた、もう終わったわ」

紗矢「神様、もうなにも願いを叶えてくれな  
いよ」

正人「俺のせいじゃないよ。壊れてたんだよ」

正人、鈴を元に戻そうとするが、付け方がわからず、適当な場所に置いて済ませる。

泰士「基紀、あそこにあるの、安徳天皇の石

じゃないか？」

基紀「そうだ。あの絵と同じ石だ」

5人、御神体の前へ。  
離れたところから、なにかが5人に視線を注いでいる。

○ 永楽寺のお堂

古代が護摩を焚いて経を唱えている。

○ 加上神社

御神体に魅了されている5人。

未来「きれいね」

紗矢「吸い込まれそう」

正人「これに神の力があるのか？」

未来「バカね。あれは迷信よ」

紗矢「そう。お寺の宣伝。ああやって由緒あ

る寺だっと思ひ込ませるのよ」

泰士「これだっけ絵に似せて作ったレプリカ

だよ」

基紀「それにしてもきれいな石だな」

基紀、そっと御神体に触れる。

その瞬間、ポケットの中が異常に熱くなる。

基紀「アチッ！」

驚いて基紀に注目する4人。  
基紀、ポケットから燃えかすを取り出し、  
地面に叩きつける。

○ 永楽寺のお堂  
護摩の炎がぼうつと大きさを増す。  
古代、ムムと唸る。

○ 加上神社  
基紀「燃えるおふだを踏みつけて鎮火。」

未来「なにそれ？」

基紀「おふだだよ」

紗矢「和尚さんにもらったやつ？」

基紀「ああ。ポケットに入れてたんだ」

泰士「なんで燃えるんだ？それも、海につか

って濡れてたやつだろ？」

基紀「油かなにか染みこませていたんだろ。」

それが静電気かなにかで着火したんじゃないか

紗矢「静電気ねえ。それで森にも虫がいなか

ったのかな？」

泰士「そんなこと関係あるのか？」

紗矢「虫って特別な周波数に反応するのよ。」

この島の地下に強い磁場があれば、それが

静電気に転換されて、虫を寄せつけないの

かも」

正人「へえ。じゃ、その磁場ってやつが俺た

ちをここへ引き寄せたってわけか」

未来「正人、珍しく冴えてるじゃない」

正人「へへ。インタールハイだぜ」

和やかなムードの中、後ろから声がかか

る。

シゲ「あんたら、なにやっつとる？」

驚いて声がした方に注目する5人。

シゲ「シゲは警戒する様子もなく、穏やかな表

情で話しかける。」

シゲ「あんたら、人間か」

基紀「あんなに驚きのあまり言葉が出ない。」

シゲ「きつねが化けとるのかいの」

未来「きつねが化けとるのかいの、緊張が解ける。」

未来「きつねだつて、」  
紗矢「おじいちゃん、かわいい」

基紀「俺たち人間だよ」御神体様が使わせてくれたのじゃな。ありがたや、ありがたや」

基紀「と、御神体に向かつて拝む。ありがたや」  
基紀「御神体？それって安徳天皇の持ってい

た石ですよね？」

シゲ「安徳天皇！」  
基紀「ええ。平家の安徳天皇ですよ」

シゲ「その名を口にしちゃならん！それは忌

み言葉じゃ。祟りがあるぞ」  
シゲ「5人、シゲの恐れように戸惑う。

シゲ「第一、それとはなんじゃ。御神体様と  
お呼びせんか。ワシらは昔から御神体様と

お呼びしとる」  
基紀「すいません」

泰士「おじいちゃん、ここって無人島じゃな  
いの？」

シゲ「バカ言うでない。ワシら、ちゃんと住  
んでるわ」

紗矢「ワシらつてことは、おじいちゃん以外  
にもいるの？」

シゲ「もちろんじゃ。うちの婆さんもいれば、  
トクさんもおるし、ふみさんもおる」

5人、互いに顔を見合わせ、ひそひそと  
話す。

未来「どういうこと？」  
紗矢「あの和尚さん、嘘言つたのかな？」

基紀「そんな風には見えなかつたけどな」  
正人「他の島と間違えたんじゃない？」

泰士「かまな。結構、年だったし、ボケが入  
ってるのかもね」

未来「なるほどね」  
シゲ「5人をじっと見ている。」

○ 加上村

シゲ「シゲが5人を引き連れて歩いている。  
あれ、あそこがヒデさんとすぎさんの家。そ

そのこの小川を挟んでマツさんとふみさん。  
この道の先に見えとるのがトクさんとさち  
さんの家。その奥がワシとうちの婆さんの  
家じゃー  
シゲ「おじが紹介する村人以外の家もある。  
未来「おじいちゃん、あの家は？」  
シゲ「ああ、あそこはもう誰も住んどりやせ  
ん」

ぼ「ぼつと空き家も目につく。  
5人、珍しげに村を見ている。

基紀「時代劇のセットみたいだな」

泰士「こんなところ、まだ日本にあっただ」

未来「トトロとかいるんじゃない？」

正人「百姓一揆とかしそうだね」

紗矢「バカ、聞こえるわよ」

正人「大丈夫だよ。あのおじいさんもかなり  
の年だろうから」

未来「おじいちゃん、いくつぐらいだろ？」

正人「百はいつてるんじゃない？」

紗矢「昔話に出てきそうでもないね」

未来「正直いさんって感じ」

紗矢「そうそう」

5人、ふふと笑う。

シゲ「足を止める。

シゲ「お、あそこにおけるのはマツさんとふみ  
さんじゃー」

マツとふみ、畑仕事をしている。

シゲ「おーい」

シゲ「おーい」

シゲ「手を振る。

マツとふみ、応じる。

5人、声を揃えて大きく手を振る。

「おーい！」

○ 加上村の集会場

基紀「5人が上座に横に並んで座って  
いる。

シゲ「以外の村人9人が下座に座る。

シゲ「それは中間に座って村人を紹介。

シゲ「それがうちの婆さんのきく」



きく、こくりと頭を下げる。

5人、頭を下げる。

シゲ「隣がトクさんとさちさん」  
トク「どうも」

トクとさち、頭を下げる。

5人、頭を下げる。

シゲ「次がヒデさんとすぎさん」

ヒデ「なんじやって？」

すぎ「ヒデさんとすぎさんだつて紹介してく

れたんですよ」

ヒデ「なんじやって？」

すぎ、ヒデの頭を押さえて礼をさせる。

自分もぺこりと頭を下げる。

5人、笑いをこらえ、頭を下げる。

シゲ「ヒデさんはちよつと耳が遠いんじや。

勘弁してやってください」

5人、恐縮する。

ノブ「あ、ワシはノブ。こっちはせんです」

ノブとせん、頭を下げる。

5人、頭を下げる。

シゲ「最後になつたが、あちらがさつき畑で

会つたマツさんとふみさんじや」

マツとふみ、頭を下げる。

5人、頭を下げる。

シゲ「そして、ワシはシゲと申します。以上、

この十人がこの島の住人じや」

5人、改めて深く頭を下げる。

シゲ「では、お若い方たちにも自己紹介して

いただきますしようかな」

基紀「えー、ぼくは橘基紀です。東京から来

ました」

ノブ「ほう。東京府からわざわざ」

せん「それはそれはごくろうさまで」

正人「正人と未来、声を潜めて話す。

未来「東京府ってなに？」

正人「確か、戦争の前は東京府って言った

のよ」

正人「変なの」

泰士「ぼくは浅井泰士です。ぼくたちは同じ

大学の同級生です」

ヒデ「なんじやって？」  
すぎ「大学生って言ったんですよ。大学生」

ヒデ「なんじやって？」  
紗矢「私は木下紗矢です。19才です」

ふみ「ほう、19才」  
せん「ありがたや。ありがたや」

せん「両手を合わせて拝む。」  
紗矢「なにがありがたいのか意味がわか

らないが作り笑いで返す。  
未来「私は小川未来です。よろしくお願いし

ます」  
きく「かわいいのう」  
さち「ほんに、ほんに」

未来「照れる。」  
きく「食べてしもうたいぐらいじゃ」

きく「言った矢先にアツと口を手で押さ  
える。

戒めるような視線をきくに向けるシゲ。  
未来「首を傾げる。」

正人「ぼくは久保正人です。あの……」  
正人「口ごもる。」

老人たち、前のめりに正人を見る。  
基紀たち4人も正人を探り見る。

シゲ「どうなさった？」  
正人「あの……」

シゲ「言いたいことがあったら、はっきり言  
いなさい」

正人「あの……ぼく……」  
シゲ「なるほど。わかった、わかった」

正人「顔を赤らめる。」  
他の4人も腹をさする。

カカツとシゲが笑うと、他の村人たちも  
ワツと声をあげて笑う。

基紀たち5人、恥ずかしさに小さくなる。

○ 加山村 夕方  
ゆっくりと陽が落ちてゆく。

○ シゲの家 客間

きく「たち老婆が食事を用意する。」

シゲ「以外の男連中はいない。」

横に並んで座る。基紀たちの前にずらりと御膳が運ばれる。

肉に魚に野菜がたつぷりのご馳走。

そつとつまみぐいしようとする正人。

隣から未来がペシツと手を叩く。

山盛りのご飯が行き渡る。

シゲ「さ、どうぞ」

基紀「たち、声を揃えて、

「いただきます」

5人「ガツガツ食べる。」

正人「うまい。うまい」

未来「ほんと。こんなの初めて」

泰士「これ、なんの肉ですか？」

シゲ「子どもじゃよ」

泰士「子ども！」

5人「喉につかえる。」

基紀「子どもってことは、人の肉？」

シゲ「鹿じゃよ、鹿。子鹿の肉じゃ」

カカツと笑うシゲ。

5人「ホツとする。」

きく「おじいさん、人が悪いですよ」

シゲ「すまん、すまん」

カカツとさらに高笑い。

きく「みなさん、すいませんねえ。おじいさ

ん、久しぶりに若い人たちに会えたものだ

から、はしゃいでおるんですわ」

基紀「あ、いや。そんな：ぼくも楽しいで

すから」

きく「あんた、ご飯のお代わりは？」

正人「あ、お願いします」

正人「わずかに残っていたご飯を平らげ、

きくにお椀を渡す。

せん「あんた、お汁、なくなつとるじゃない

の。遠慮したらいかんよ」

未来「すいません。じゃ、お代わりください」

せん「それでええ、それでええ」

給仕を控えているふみたち。

ふみ「いい食べっぷりじゃ」

すぎ「見てると、こっちまで食欲がわいてくる」

さち「ほんに、ほんに」

基紀「おじいさんたちは食べないんですか？」

シゲ「ワシらはええんじや」

基紀「ぼくたちだけいただいて、なんか悪いですな」

シゲ「ええんじや、ええんじや。あんたたちは大切なお客様じやから」

紗矢「他のおじいさんたちは？」

シゲ「みんなは祭りの用意をしとる」

未来「祭り？お祭りするの？」

シゲ「そうじや。お供えも揃ったでな」

きく「祭りじや、祭りじや」

ふみ「祭りじや、祭りじや」

未来「いつやるの？」

シゲ「明日は仏滅じやて、明後日に宵の祭り。」

きく「それで次の日が本祭りじや」

さち「ほんに、ほんに」

基紀「顔を付き合わせて打ち合わせ。」

基紀「ぼくたちもなにかお手伝いできませんか？」

シゲ「手伝うもなにも、あんたらは祭りの主役じやて」

紗矢「私たちが主役？どういう意味？」

シゲ「そんなこと言うたかな。こりや、ワシもついにボケたかの」

シゲ「カカツと声をあげて笑う。」

基紀「きよとんと顔を見合わせている。」

○ シゲの家 お風呂 夜

温泉宿のような石の風呂。

白濁した湯に未来と紗矢がつかっている。

未来「気持ちいいね。旅行に来てるみたい」

紗矢「：ちがうよ：旅行じやない」

未来「紗矢、いい加減にしなさい」

紗矢「未来：」

未来「あんたはあの警官にレイプされた」

紗矢「……」  
未来「……」  
紗矢「……」  
未来「……」

未来「……」  
紗矢「……」  
未来「……」  
紗矢「……」

未来「……」  
紗矢「……」  
未来「……」  
紗矢「……」

未来「……」  
紗矢「……」  
未来「……」  
紗矢「……」

未来「……」  
紗矢「……」  
未来「……」  
紗矢「……」

未来「……」  
紗矢「……」  
未来「……」  
紗矢「……」

未来「……」  
紗矢「……」  
未来「……」  
紗矢「……」

未来「……」  
紗矢「……」  
未来「……」  
紗矢「……」

○ シゲの家 広間

基紀「……」  
シゲ「……」  
基紀「……」  
シゲ「……」

基紀「……」  
シゲ「……」  
基紀「……」  
シゲ「……」

基紀「……」  
シゲ「……」  
基紀「……」  
シゲ「……」

基紀「……」  
シゲ「……」  
基紀「……」  
シゲ「……」

基紀「……」  
シゲ「……」  
基紀「……」  
シゲ「……」

基紀「……」  
シゲ「……」  
基紀「……」  
シゲ「……」

基紀「御神体様の？ どういうことですか？」

シゲ「それは祭りの日にわかる」

基紀「：：」

シゲ「ところではそれは外国のお金か？」

基紀「いやだな。一万円札ですよ」

シゲ「ちよつと拝見」

シゲ「一枚を手に取り、まじまじと見る。

「こんなのは見たことないのう」

万札を基紀に返す。

基紀、首を傾げながら、部屋の中を見回

す。

壁に飾られた額入りのモノクロ写真。

旧日本軍の制服を着た青年。

基紀「あの人は？」

シゲ「あれは息子じゃ。満州に行っておる」

基紀「満州って中国にあつた？」

シゲ「満州は支那の隣じゃ。大学でなにを学

んでおるんじゃ」

基紀「：：」

孫や息子の世代と撮った村の集合写真も

飾つてある。

基紀「村の人たちはどうしたの？ シゲさんた

ちを置いて島を出たの？」

シゲ「ワシらは置いていかれたんじゃない。

みんなお国のために満州に行った」

基紀「お医者さんもないんでしょ。困らな

いの？」

シゲ「ワシらには御神体様がついとる。医者

などいらん」

○ シゲの家 脱衣所

湯上りの未来と紗矢がきくとさちに浴衣  
を着せてもらつてゐる。

未来「私、浴衣着るの初めて」

きく「そうかい、そうかい。きつくないかの？」

未来「大丈夫。これ、かわいいね」

きく「娘の若い頃のやつじゃ。あんたには少

し小さいかと思つたけど、ちよつとよかつ

たの」

未来「娘さんはどこに行つたの？」

きく「みんなと大陸に渡って行った。」  
未来「声を潜めて紗矢に尋ねる。」

紗矢「大陸？」  
未来「本土のことじゃない？」

未来「納得し、  
「島には帰ってこないの？」

きく「勝てばのう。勝ちさえすれば、帰って  
来るわな」

未来「勝つてなにに？」  
きく「それよりお風呂はどうじゃった？」

未来「すぐ気持ちよかった」  
きく「そりや、なにより、なにより」

紗矢「なにか入浴剤が入ってるんですか？」  
きく「山でとった薬草をな」

未来「ふうん。それが効いてるんだ」  
きく「肉が臭いと御神体様が嫌がるんでな」

紗矢「どういうこと？」  
未来「私たち、そんなに臭かった？」

きく「そんなこと言うたかの？なにかの聞き  
違いじゃて」

さち「ほんに、ほんに」  
未来と紗矢、顔を見合わせて首を傾げる。

○ シゲの家 縁側

基紀「たちも入浴後に浴衣に着替えている。  
井戸で冷やしていたスイカをきくが引き

上げる。  
物珍しげに見ている5人。

まな板の上できくが包丁でスイカを割る。  
スイカを頬張る5人。

シゲときくが和やかに見守っている。

○ シゲの家 離れ

障子から入る月あかり。  
布団の上で声を潜めて話す5人。

紗矢「おじいちゃんたち、私たちのこと怪し  
んでいないのかな？」

泰士「そんな感じはないな」  
基紀「島には警官もいないし、テレビも電話

もないからな。外の事件なんて関係ないん

だろ」

未来「いい人たちだよね」

紗矢「ちよつと、おかしいところあるけど」

正人「ほんと、ほんと」

基紀「みんな、ボケが入ってるんだろうな」

泰士「なんじゃって？」

ヒデ「物の真似に4人、笑い声をこらえる。」

正人「ここにきてよかったね」

紗矢「ほんとね」

基紀「ここ、天国みたいだな」

紗矢「それ、私も思った」

未来「こんな夏休み、生まれて初めて」

泰士「俺もだ」

紗矢「お祭りも楽しみね」

基紀「祭りが終わっても、いいのかな？」

未来「頼んでみようよ」

泰士「そうしよう」

正人「年寄りばかりだから感謝してくれるよ、

泰士「なんじゃって？」

4人、また笑い声を殺す。

○ 加上村

月あかりの下、8つの人影がうごめく。

シゲの家へぞろぞろと進む。

○

シゲの家 離れ

すやすやと眠る基紀たち。

障子がすつと開く。

シゲと他の老人たち十人が入って来る。

シゲたち、まじまじと基紀たちを見る。

声を潜めて話す老人たち。

ノブ「よう眠っておるの」

せん「かわい寝顔じゃ」

さち「ほんに、ほんに」

きく「肉づきもいい具合じゃて」

トク「今年は豊作じゃな」

ヒデ「なんじゃって？」

すぎ「今年には豊作じゃ言うたんですよ」

ヒデ「ああ。そうじゃ、そうじゃ。豊作じゃ」



マツ「これも御神体様のおかげじゃて」

さち「ほんに、ほんに」

ふみ「ありがたや、ありがたや」

シゲ「ありがたや、ありがたや」  
老人たち、両手を合わせて拝む。  
すやすやと眠り続ける基紀たち。

○ 加上村 翌朝

○ シゲの家の庭

洗濯された基紀たち5人の洋服が物干しに干されている。

○ 加上村

基紀たち5人、シゲたち老人の農作業に同行している。

基紀たちは昭和初期の服を身につけている。

シゲ「正人はカゴを積んだ荷車を引いている。うんなんか申し訳ないのう。手伝ってもら

基紀「申し訳ないのは俺たちですよ。ご厚意に甘えさせてもらっているので」

せん「服の塩梅はどうじゃる？」

紗矢「いい着心地です」

ふみ「すまんのう。そんなもんしかなくて」

泰士「そんな。着替えもなかったから助かったます。ありがとうございます」

きく「礼儀正しい若者たちじゃな」

さち「正人はへ口へ口になっっている。」

正人「ねえ、誰か代わってよ」

未だ「やってみたいって言い出したの、あんたでしょ」

正人「でもこれ、めちやくちや重いんだよ」

未だ「情けないこと言わないの。おじいちゃ  
正人「：もうダメだ」  
泰士「代人、足を止める。どけよ、ほら」

泰士「うわっ」と引っ張る。

泰士「な、重い」

正人「なんの、これしき！」

泰士「おじいながら顔には脂汗。」

泰士「おじいちゃんたち、本当にこれ引けるの？」

ヒデ「なんじゃって？」

すぎ「荷車を引けるのかって言ってるんですよ」

ヒデ「ああ」

ノブ「慣れん者には難しいじやろな。コツがあるからのう」

さち「ほんに、ほんに」

マツ「婆さんでも引いとるからな」

泰士「嘘でしょ」

ふみ「代わってみ」

泰士「足を止める。」

ふみが代わると、すすいと進む。

涼しい顔をしているふみ。

泰士と正人、啞然としている。

○ 田所商会

焼け跡を現場検証している警察。

事務所も半分焼けて落ちている。

西崎と郁美の姿もある。

わずかに残ったアメ車の車体。

血のついた日章旗が引っかかっている。

○

林の中 木々で覆われた一本道を進む一行。

枝分かれに小道が伸びている。

その先には洞窟が見える。

洞窟の入り口を塞ぐように、しめ縄が掛

けてある。

紗矢「おじいちゃん、あれは？」

シゲ「あそこは御胎内じゃ」

基紀「中になにがあるんですか？」

シゲ「なんのためにあるの？」

未来「なんのためにあるの？」

シゲ「知らん」  
正人「入っていい？」  
シゲ「いかん。入れば御神体様のバチが当た  
るぞ」  
さち「ほんに、ほんに」  
一行、洞窟の前を通り過ぎて行く。  
正人、視界から消えるまで横目で見てい  
る。

○ 林の終わり  
林を抜けると、一面に畑。  
方々に赤い花が咲いている。

○ 畑  
収穫を始める一行。  
老人たちの手際を真似る基紀たち。  
泰士、しばらくして、難しい顔でつま  
んだ実を見ている。

基紀「なにサボってんだよ」  
泰士「これってケシの実じゃないか？」

紗矢「まさか」  
泰士「あの赤いのだ。あれ、ケシの花だろ」

ヒデ「なんじゃって？」  
すぎ「ケシの花かって言ったんですよ」

ヒデ「そうじゃ。ケシじゃ。ケシの花じゃ」  
未来「ケシってドラッグのケシ？」

ヒデ「なんじゃって？」  
すぎ「さて？ドラがなんとか」

基紀「ケシの栽培って違法でしよ。シゲさん、  
大丈夫なの？」

シゲ「なにが違法なもんか。これはお国のお  
達しで育てておるんじゃ」

正人「国って？日本の？」  
シゲ「当然じゃ」

さち「ほんに、ほんに」  
基紀「たち5人、顔を見合わせる。」

未来「どこかに売ってるの？」  
シゲ「売る？バカ言うでない。祭りじゃよ」

さち「ほんに、ほんに」  
ノブ「祭りじゃ、祭り」

せん「祭りじゃ、祭り」

○ 永楽寺のお堂  
正装の袈裟を身につけた古代が護摩を焚  
いて経を唱えている。  
戸や障子が風でかたかたと揺れている。  
炎は激しさを増している。

○ 永楽寺のふもとの港  
倉庫の裏に停めてある基紀の車。  
その前に現れる檜山と新城。  
海から吹く潮風が強くなってゆく。

○ 加上村 夕方  
風一つないおだやかな田園風景。  
夕涼みをしながらかな田園風景。  
たち5人。

正人「おじいちゃん、国のお達しで育ててる  
って言うてたけど、そんなことあるわけ？  
違法だろ？」

未来「戦争中は合法だったの」  
正人「戦争って、ベトナム戦争？」  
未来「バカ。太平洋戦争よ」

正人「どっちでも同じだろ」  
未来「もう、やだ」

泰士「戦争のときは、特攻隊の人とかも使っ  
ていたんだよな」

紗矢「薬局で普通に買ったのよね」  
正人「戦争やって、薬もやって。なんか、す  
ごい時代だったんだな」

未来「昔の話よ」  
正人「昔、昔の話じゃて。あるところに……」

未来「笑えない」  
正人「昔、昔の話じゃて。あるところに……」

紗矢「あんた。絶対にバチが当たるよ」  
正人「悪かったよ。脅かさないでくれよ」

基紀「祭りで使うって、俺たちもやらされる  
のかな？」

正人「やだ！俺、注射、イヤ」  
未来「ちよつと怖いね」

正人「誰かやったことある？」

基紀「バカ。あるわけないだろ」  
紗矢「あれ、藪の奥を覗き込む？」  
泰士「お墓だ」

○ 墓地

基紀「墓地たちがやって来る。雑草が伸び放題。」

基紀「手入れされず、苔むしている。簡素な石の墓が5つ並んでいる。」

基紀「風化していて文字が読めないな」  
未来「おじいちゃんたちの親とかかな」  
紗矢「そうでしょうね。きつと」  
泰士「でも、なんでこんなことになっているんだ？」

基紀「なにかわけがあるんだろ？」  
基紀「それを真似て他の4人も拝む。」

○ シゲの家の風呂 夜  
ゆつくり風呂につかっている未来と紗矢。

○ シゲの家の客間

ガツガツと夕食を平らげる正人。  
和やかに食事する基紀たち。  
微笑ましげに見ているシゲときく。

○ 加上村 翌朝

○ シゲの家の庭  
目を覚ます基紀たち。

基紀「あれ？正人は？」  
未来「トイレじゃないの？」  
紗矢「おかしいよ。服も着替えたみたい」  
未来「あ！洞窟だ。洞窟に行つたんだよ」  
基紀「洞窟って、御胎内のことか？」  
未来「言うん中に入つてみたいて、しっこ」

泰士「おじいちゃんたちに怒られるぞ」  
基紀「あのバカ！」

基紀「慌てて着替え始める。  
未来「どうするの？」  
基紀「連れ戻すんだよ。おじいちゃんたちに  
気づかれないうちに」

○ 林の中  
しめ縄を避けて御胎内へ、恐る恐る入っ  
て行く正人。

○ 御胎内の中  
正人「ひんやりと奥へ進む正人。  
前へ。冷蔵庫みたいだ」

正人「なんにもないな……」  
前へ。  
正人「おじいちゃん、大げさなこと言ってた  
けど、大したことないじゃないか：おや？  
なにかあるぞ……」

暗がりの中、天井の方になにかが見える。  
入り口から基紀たちの声がする。

基紀「正人！出て来いよ！」

正人「ちよつと待ってよ！」

未来「抵抗しないで出てきなさい！」

正人「なにかあるんだよ！あとちよつとだ  
け！ね！」

泰士「ね！じゃないよ！宵祭りが始まるんだ。  
早く戻らないと、迷惑かけるだろ」

正人「わかったよ：チェツ」  
後ろ髪ひかれるように入り口へ。

○ 御胎内の外  
未来、出てきた正人の耳を引っ張る。

正人「イテテッ！離してくれよ」

未来「あれほどやめときなさいって言ってた  
のに！」

正人「だって：痛い！離して！」

未来「あんたは気が小さいクセにどうして、  
こういふことをするのよ！」

正人「しょうがないじゃないか：好奇心とい  
うか、学術的探求というか……」

未来「なにが学術的探求よ。あんたのはただ

野次馬根性」  
未「未来、耳から手を離してやる。天井からな

正人「中になにかあったんだよ。天井からな  
にかが釣り下がっていたよな」

紗矢「どうせ石のつららかなにかでしよ」  
泰士「鍾乳洞とじゃ珍しくないよ」

正人「そうは見えなかつたんだけどな」  
基紀「いいから早く帰ろうぜ」

未来「正人を引く張って行く」  
正人はまだ後ろ髪ひかれる様子。

○ 永楽寺のふもとの港  
漁師が船に乘ろうと歩いて来る。  
自分の船がないことに気づき狼狽する。

○ 沖加島へと進む漁船。  
操縦しているのは新城。  
檜山は拳銃の銃弾を入れ直しながら、鼻

歌を口ずさむ。  
檜山「ジャンジャヤ」

新城「アニキ、なんですかそれ？」  
檜山「ワルキューレの騎行だよ」

新城「ワルキューレの騎行だよ」  
檜山「ワールグナーだよ。ワールグナー」

檜山「新城、首を傾げて操縦する。  
ジャジャ」

檜山「教養のないやつはイヤだねえ：ジャン  
ジャジャ」

○ シゲの家 客間  
巫女装束を、きくたち老婆に着せてもら  
っている未来と紗矢。

○ 加山村  
神社へと通じる道をシゲたち老人につい  
て行く基紀たち5人。  
基紀たちは白い羽織に松葉色の袴。  
シゲはたち老人は、白い上下の羽織袴。

頭には烏帽子をかぶっている。  
きくたちは老婆は、巫女装束。

○

加上神社  
御神体の前に敷いた御座に基紀たち5人

が並んで座っている。  
お神酒が並べられる。

未来「これ、お酒だよね？ 私たち、まだ未成  
年なんだけど」

ノブ「あんたらいくつだ？ 16か？」  
未来「これでも19です。そんな子どもじゃ

ありませんよ」  
ふみ「だったら、もう立派な大人じゃて」

すぎ「私は15で嫁ぎましたよ」  
ヒデ「なんじゃって？」

すぎ「私は15でおじいさんのところに嫁ぎ  
ましたよって言ったんですよ」

ヒデ「そうじゃ、そうじゃ。婆さん、かわい  
かったのう。ひひひ」

すぎ「じいさんったら、やめてくださいよ。  
ふふふ」

きく「お酒といっても神聖なお酒じゃ。形式  
じゃと思うて、さ、ぐいと」

シゲ「基紀たち5人、ぐいと飲み干す。  
「お見事。いい飲みっぷりじゃ」

さち「ほんに、ほんに」  
基紀たち、熱い息を吐く。

5人の目に普通の酒にはない高揚感が浮  
かんんでいる。

未来「美味しい」  
正人「お代わりある？」

きく「遠慮なく。たんと飲みなされ」  
トク「祭りじゃ、祭りじゃ」

せん「祭りじゃ、祭りじゃ」  
さち「ほんに、ほんに」

○

加上島の岸  
檜山と新城が上陸する。  
激しい波の音にお囃子が重なる。



○ 加上神社  
トクとさち、ヒデとすぎ、ノブとせんが  
笛や鼓でお囃子を演奏している。  
シゲときく、マツとふみが能を舞う。  
シゲは翁の能面。  
きくは小面の能面。  
マツは獅子口の能面。  
ふみは恵比寿の能面。  
酒に酔った基紀たちを、お囃子が更に気  
持ちよくさせている。

○ 藪の中  
風にざわめく木々の音にお囃子が重なる。  
檜山と新城が外へ抜け出して行く。

○ ケシ畑  
檜山と新城が出て来る。  
一面に広がるケシに唾然となる二人。  
檜山「なんだこりや？」  
新城「アニキ、これ、ケシじゃないですか？」  
檜山「わかってるよ！」  
新城「こんなところで育てるなんて、どこの  
組でしょうね？」  
檜山「どこの組だろうと構やしないさ。根こ  
そぎ：いや、この島ごと俺のものにしてや  
るよ」

○ 永楽寺の境内  
西崎と郁美が古代に話を聞いている。  
古代の手には写真。  
監視カメラで撮影された基紀の車の車内  
の画像。  
5人の顔がそれぞれはつきりとわかる。  
古代「この若者たちなら、先日、こちらに参  
りましたよ」  
西崎「どこに行くか、言っていなかったです  
か？」  
古代「：きつと、あの島でしょう」  
西崎「古代、加上島を指す。もう逃げられんぞ」

古代「あんなら、行くのはやめたほうがいい」  
 西崎「犯人が目の前にいるんだ。そういうわ  
 けにはいきませんよ」  
 古代「特にあんた。あんたはおやめなさい」  
 郁美「私ですか？」  
 古代「そう。逃げられんのは、あの若者たち  
 だけじゃない。あんたたちも同じやもしれ  
 ん」  
 西崎と郁美、わけがわからず顔を見合わ  
 せる。  
 古代、安徳天皇の絵を見て話す。  
 古代「こういう話がある」  
 西崎と郁美、興味を持つ。  
 古代「そこに描いてあるのは安徳天皇じゃ」  
 郁美「壇ノ浦の戦いで亡くなった子どもです  
 ね」  
 古代「安徳天皇はあの戦いで死んだのではな  
 い」  
 郁美「どういうことですか？」  
 古代「安徳天皇はそこに描かれた侍と侍女た  
 ちとともに海へ身を捧げたあと、あの島へ  
 流れついたので」  
 西崎と郁美、加上島を見る。  
 古代「島で新しい生活が始まったが、島には  
 食料がなかった。飢えに苦しんだ挙句、狂  
 った侍や侍女たちは安徳天皇を食ってしま  
 った」  
 郁美「酷い」  
 古代「幼い子ども故、安徳天皇も長く生きの  
 びることは不可能だったのだ。だが、弔う  
 こともせず食った者たちは、最早、人では  
 なくなり、鬼となった」  
 西崎「俺、こういう話、苦手なんだ」  
 郁美「黙って聞きなさいよ」  
 古代「海に出ては漁師たちを襲い、その肉を  
 食った。そして、肝を安徳天皇の墓前に捧  
 げ、崇りから逃れようとしたのだ」  
 郁美「鬼になつた侍たちはどうなったんで  
 か？」  
 古代「噂を聞きつけた朝廷は位の高い僧侶を

島へ送り、鬼たちを退治させた。それは時  
として、壇ノ浦の戦いから百年が経った頃  
じやった」

西崎「え？それって、侍たちは百才以上生き  
ていたということですか？」

古代「その通り。そこに描かれた石が鬼ども  
に力を与えておったのじや」

郁美と西崎、絵の石を見る。

古代「時が流れ、あの島にも人間が住み着い  
た。じやが、歴史は繰り返す。戦争が人を  
鬼にするんじやよ。やむなし」

古代、加上島に向かって両手を合わせ、  
ぶつぶつと唱える。

西崎「よくできた話ですね。信じてしまいま  
したよ」

古代、じろりと西崎を見る。

西崎、たじろぐ。

西崎「本当の話じやないんではよ？」

古代「物語が真実かどうかは、誰が決めるも  
のでもない。聞いた者の心に真実がある」

西崎「バカバカしい。ま、私たちも鬼を捕ま  
えるのが仕事みたいなものでしてね。あの  
島へ行ってみるとしますよ」

古代「あんたが鬼にならんことを願います」

西崎「ご協力ありがとうございます。では、  
失礼します」

頭を下げ、車の助手席へ乗り込む。

郁美、深く礼をして運転席へ。

車が永楽寺を出て行く。

古代、車に向かって両手を合わせ、ぶつ  
ぶつと唱える。

○ 加上神社の近く

檜山と新城が歩いて来る。

お囃子が流れてくる。

新城「アニキ、あっちから聞こえますよ」  
檜山と新城、神社へ入って行く。

○ 加上神社

能の舞も最高潮。

シゲが神刀を手に舞っている。  
銃声。

お囃子がぴたりと止む。

檜山「祭りはそのままで」

拳銃を手にした檜山と新城が威圧する。

基紀「5人はきれいに酔いが覚めた。」

お囃子の老人たちは平然としている。

能の老人たちは面表情がわからない。

新城「アニキ、あいつらですよ。社長が教え

てくれたのは」

檜山「お紀たち、うろたえる。ウチの組の金を

盗んだのは」

基紀「金なら返す。だから、乱暴はするな」

檜山「なにが乱暴はするのだ。楽に死ねると

思ふなよ。たっぷりかわいがってから殺し

てやるからな」

紗矢「キャッ！」

新城が紗矢の体をまさぐっている。

新城「アニキ、俺、こいつをもらっている。い

すか」

紗矢「やめて！」

檜山「おう。楽しめ、楽しめ。お祭りだ。俺

はそっちの女で楽しませてもらおうよ」

未来、正人の腕をぎゅっと握る。

正人、震えている。

泰士「おい！やめろ！」

新城が泰士に拳銃を向ける。

基紀、泰士の腕をつかんで止める。

檜山「ニイちゃん、セイガクさんの割にいい

根性してんじゃねえか」

泰士「おい！紗矢から離れろ！」

檜山「あのコのこと好きなのか？おい、新城、

こいつの前でその女やってやれ。ハハ」

泰士「お前ら、ぶっ殺してやる！」

檜山「お、これ酒か？喉が乾いてたんだ」

檜山、お神酒をぐっと煽る。

檜山「なんだこれ？こんな美味しいの初めてだ。

おい、ババア。もつと持ってこい」

ふみ、新しいお神酒を用意する。

檜山「檜山、酒を一気に煽る。  
ちやうまいぞ」

新城、ひと口。

新城「カーツ。こりゃいい。たまりませんね」  
檜山「おい、じじい。なんか演れよ」

ヒデ「なんじやって？」

すぎ「お囃子をやれって言うてるんですよ」

ヒデ「自分で止めたくせにまた演れとは勝手  
なやつじゃ」

ヒデ、ぶつくさ言いながら笛を吹く。

すぎ「私たち演奏を再開する。」

檜山「いい曲じゃないか。おい、その面つ  
けた奴。踊れよ」

面をつけたシゲたち、微塵も動かない。

檜山、シゲの足元に銃を一発。

シゲ、動かない。

銃声に基紀たち、すくみ上がっている。

ヒデ「たちは動揺せず演奏する。」

新城、紗矢を押し倒す。

紗矢「いや！」

泰士「やめろ！」

泰士、新城に飛びかかる。

檜山、泰士を後ろから撃つ。

泰士、胸を撃ち抜かれて倒れる。

血が御神体へ飛び散る。

基紀と正人と未来、啞然。

紗矢「泰士！」

紗矢、新城を押しつけ、泰士のもとへ。

演奏は止まらない。

泰士「紗矢：ごめん：また守ってやれなかつ

た：」

紗矢「泰士：」

泰士「：俺、黙ってたけど：好きだったんだ

：ずっと：」

紗矢「：知ってた：ごめんね：応えてあげな

くて：」

泰士「：謝らないでくれよ：また会えたら：

次は：！」

泰士、絶命。

紗矢「泰士！」

檜山「檜山、声をあげて高笑い拍手。」

文芝「居たってやつじゃねえか」

基紀「お前も死ぬか？」

基紀「お前の顔に銃を突きつける。」

檜山「ツカツカとシゲが近寄り、面をとる。」

えな「シゲ、じつと檜山を見る。」

檜山「シゲ、このバチ当たりが！」

シゲ「腕を叩き斬る。」

檜山「グアアッ！」

新城「アニキ！」

新城「よくもアニキを！」

新城「シゲに銃を向ける。」

新城「きく、新城の後ろに回り、踊りに使っ

ていた紐を首にかける。」

新城「グッ！」

新城「あつという間に窒息死。」

基紀「あつという間に窒息死。」

シゲ「シゲ、悶絶している檜山の前へ。」

シゲ「シゲ、大事なお供え物に手を出した上に御神

様を血で汚すとは……」

シゲ「シゲ、大事なお供え物に手を出した上に御神

様を血で汚すとは……」

○ 永楽寺のふもとの港

波が荒れている。西崎と郁美に応じている。

警官「誰も船は出せんと言うてます。この波じゃ自殺行為だ」と

西崎「仕方ないな。明日まで待つか」

西崎「目を忌々しそうに見る。島を忌々しそうに見る。」

警官「申し訳ありません。昨日、今日と2隻も漁船を盗まれて、みんな警察に協力しよ

うとせんですよ。無理は言えんです」

郁美「じつと海を見渡している。」

西崎「どうした？」

郁美「この景色、見たことがあるような気がして……」

西崎「子どもの頃にでも来たんじゃないか？」

郁美「そんなはずないんだけど……」

西島「デジャヴってやつじゃないのか。思い過ぎしだらう」

郁美「そうよね……」

○ 加上村 畑

檜山と新城の死体を積んだ荷車を引いて来るトクとさち。

トク、自分より大きい新城の死体を軽々と抱えると、肥溜めへゆつくりと浸から

せる。死体、ずぶずぶと底へ落ちてゆく。

さち、首のない檜山の死体を同じように捨てる。

トク「こいつらは世の中のゴミじゃ。ええ肥やしになるじゃろ」

さち「ほんに、ほんに」

トク「あ！婆さん。大事なもん忘れとった」

トク「これじゃ、これじゃ」

トク「檜山の頭を肥溜めへ。檜山の頭、ずぶずぶと底へ。」

トク「これでええ」

○ 林の中  
泰士の死体を荷車で運ぶヒデとすぎ。

すぎ「せっかくのお供え物がもつたいないで  
すなあ」

ヒデ「なんじゃって？」

すぎ「もういいです」

ヒデ「せっかくのお供え物がどうした？」

すぎ「聞こえてるじゃないですか」

ヒデ「ひひひ」

すぎ「嫌なおじいさんですよ」

ヒデ「どうじゃ、婆さん。もつたいないから、  
ワシらでいただいたら？」

すぎ「ダメですよ。御神体様に怒られますよ」

ヒデ「なんじゃって？」

すぎ「御神体様に怒られますよ」

ヒデ「そうじゃの。仕方ないのう」

ヒデとすぎ、荷車を御胎内へ運び込む。

○ シゲの家 離れ 夕方

基紀「泣いている紗矢。泣いてる場合じ

ゃないだろ」

紗矢「泰士：私のせいで」

正人「紗矢のせいじゃないだろ。あいつらが

殺したんだ」

紗矢「私がみんなを巻き込まなかったら、こ

んなことに」

未来「いい加減にしなさい！」

未来、紗矢の頬を叩く。

紗矢、泣き止む。

未来「今は冷静にならなきや。このままじゃ、

泰士が浮かばれないよ」

紗矢「そうよね：ごめんなさい」

基紀「この島を出よう。やくざが乗ってきた

船がどこかにあるはずだ。それを探すんだ」

正人「おじいちゃんたち、やっぱり普通じゃ

ないんだよ」

未来「お供え物に手を出してって言ってたで

しょ？あれって泰士のことじゃない？」

基紀「ああ。間違いない」

正人「とうとう、俺たちもお供え物ってこと？」

基紀「ああ。きっとそうだ」



正人「どういうこと？お供え物って？」

基紀「わかんないけど、悪い予感しかしない」

紗矢「泰士は？泰士の遺体は放っておくのか？」

未来「泰士だってわかってくれるわよ」

紗矢「：そうかな？」

正人「そうだよ！」

基紀「さ、グズグズしてられないぞ。早く逃げよう」

基紀、スーツケースを抱える。

4人、外へ。

○ シゲの家 縁側

シゲが神刀の手入れをしている。

きくは血のついた羽織袴を洗濯している。  
基紀たち、身を潜めて家の外へ。

○ シゲの家 外

基紀たち、物音を立てないように、こそ

こそと移動している。

遠くから子ども声がする。

「もういいかい？」

「まあだだよ」

「もういいかい？」

「もういいよ」

基紀たち、声を潜めて、

「あれ、子どもの声じゃないか？」

紗矢「村にはおじいさんたちしかいないはず

よ」

未来「じゃ、あれ、誰の声？」

正人「どうでもいいじゃない。早く逃げよう

よ」

基紀「そうだな。さ、行こう」

基紀たち、建物の影から一目散に駆け出

そうとする。

その前へ、鬼の能面を顔につけたマツが

現れる。

マツ「みつけた！」

「ウワアアア！」

基紀たち、声をあげて驚いて足を止める。

後ろにはシゲときくとふみが立っている。

基紀たち、腰が抜けて逃げるところではない。シゲたち、濡れ布巾で基紀たちの顔を覆う。基紀たち、気を失う。

○ 東京 夜

○ 高級料亭の一室  
芸者をお座敷にあげて一席設けられている。  
米軍司令官のマックスがスーツ姿の日本人と向かい合って座っている。  
日本人は後ろ姿しか見えない。  
マックスは上機嫌で日本酒を飲んでいる。

○ 料亭の外  
迎えの車に乗り込むマックス。  
車、出る。

○ 米軍基地  
アメリカの国旗。  
マックスの車が入って行く。

○ 基地内の廊下  
マックスが歩いて行く。  
すれちがう者は皆、足を止めて敬礼。

○ 司令官室  
壁に大統領の写真が飾られている。  
マックスが入って来る。  
直立して待っていた将校。  
将校「司令官。お帰りなさい」  
マックス「日本側の了承は取れた」  
将校「は！」  
マックス「曹長たちの復讐だ。徹底的にやっ  
てこい」  
将校「はい！」

○ 永楽寺のふもとの港 翌日

西崎 漁師を相手に苛立つ西崎。  
「まだ船を出せないのか！」  
漁師 「もう少し波がおさまらんと、刑事さんたちの命も保証できませんよ」

○ 永楽寺のお堂  
正装の袈裟を身につけた古代が護摩を焚いて経を唱えている。

○ 加上神社  
強い陽射しが照りつけている。

基紀 「御神体の前で目覚める。  
服は白装束に着替えさせられ、額に三角頭巾を付けられている。  
足には鉄の鎖がかけられている。  
同じ格好にされた正人と未来と紗矢はまだ眠っている。

基紀 「おい、起きろよ」

正人 「ん？」

未来 「ここは？」

紗矢 「基紀、なにその格好」

未来 「紗矢だって」

正人 「未来だって同じだよ……てことは俺も？」

未来 「これって死んだときの格好でしょ」

正人 「最悪……」

基紀 「考えるのはあとにして、逃げなきゃ」

紗矢 「そうね」

石で鎖を叩くが、石が割れるだけ。

あきらめず、新しい石を手にとって叩く。

後ろからシゲの声。

シゲ 「お目覚めかな」

声をした方を振り向くと、シゲたちが足並みを揃えて行進してくる。  
基紀たち、その異様な姿に圧倒される。  
シゲたち老人は旧日本軍の軍服を着ている。

腰には軍刀。  
手には三八式歩兵銃。  
きくたちは老婆はもんぺ。

手には日章旗や八紘一字と書いた旗。  
竹槍も持っている。

シゲ「生まれ！」

一行、御神体の前でぴたりと止まる。

シゲ「ただいまより、祭りを開催する！一同、御神体様に敬礼！」

きくたち老人老婆、御神体に敬礼。

唾然と見ている基紀たち4人。

シゲ「貴様らも敬礼せんか！」

基紀「え！？ああ！」

基紀たち、困惑しながら頭を下げる。

基紀「あ：あの！」

シゲ「日本男児たるもの、言いたいことがあるなら、胸を張って尋ねんか」

基紀「これは？これがお祭りなんですか？」

シゲ「これこそが我らが加上島に古くから伝

わる祭りだ！」

きく「祭りじゃ、祭りじゃ」

せん「祭りじゃ、祭りじゃ」

未来「これが祭り？」

シゲ「お供え物の生肝を御神体様に献上する

のじゃ」

紗矢「お供え物って私たちのことでしょ」

シゲ「その通り」

さち「ほんに、ほんに」

正人「どうしてそんなことをするんだよ」

シゲ「年に一度、祭りの日に御神体様にお供

え物を捧げること、ワシらは寿命を伸ば

すことができるのじゃ。いわば、健康長寿、

武運長久の祭りである」

未来「おじいちゃんたち、何才なの？」

ヒデ「なんじゃって？」

さち「おいくつですかって尋ねたんですよ」

ヒデ「知らん。そんなことはずーと昔に忘

れてしまった」

基紀「どうしてそんな格好をするんですか？」

シゲ「そんなこともわからんのか！」

基紀「わからないから聞いてるんですよ」

シゲ「防人となつて大陸に渡っていった者たちを支え、国家の最後の砦とならんがため

正人「だど決まっておるだろうが！」  
シゲ「日本人の決まってるの？」  
シゲ「大日本帝国ばんざーい！」  
シゲ「大日本帝国をあげて万歳すると、他の老人老婆も従う。」  
未来「おじいちゃん、戦争はもう終わったのよ」  
紗矢「そう。こんなことしても無駄なのよ」  
シゲ「この国賊が！なんたることを口にするか！貴様らアカか？アカだな！」  
正人「アカでもアカでもないよ。日本は戦争に敗けたんだよ」  
シゲ「敗けた？」  
正人「アメリカに敗けたんだよ」  
ヒデ「アメリカに敗けた？」  
さち「アメリカに敗けたと言ったんですよ」  
ヒデ「日本が敗けた：そんなバカな！」  
正人「シゲと老人老婆、戸惑い、ざわめく。」  
正人「原爆落とされて敗けたんだよ。そうだよな、未来」  
未来「そうよ。二つも落とされてね」  
シゲ「シゲ、正人と未来に往復ビンタ。」  
未来「もう！痛いわね！頭にくる！」  
シゲ「この非国民が！仮にも我らが神国が毛唐の国に負けるわけがなからうが！まずはおたるもの、敗けるなどと口が裂けても言うでない！」  
未来「ますらおって、私、女なんだけどね」  
シゲ「女のくせに口ごたえをするな！」  
さち「ほんに、ほんに」  
シゲ「女は黙って銃後の守りを務めておればよいのだ！」  
未来「バカバカしい。話にならない」  
基紀「狂ってる！」  
シゲ「海行かば」を歌い始める。  
トク「海行かば♪水漬く屍♪」  
えのう「シゲさんの海行かばはいつ聞いてもえ

さち「ほんに、ほんに」

○ 永楽寺のふもとの港  
西崎と郁美を乗せた漁船が加上島へ向かう。

○ 加上神社  
きくが巫女鈴を鳴らしている。  
シゲ「では、御神体様にお供え物を捧げる前

基紀「頭屋を決める」  
シゲ「頭屋とは、御神木様にその身を捧げる

神聖なる人柱じゃ」  
シゲ「それ、御神木様が選ぶよ」  
未「そんなの、どうやって決めるのよ」

シゲ「それは、基紀たちを指差して歌い出す。  
シゲ「どれにしようかな、裏の神様の言う通

シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」

シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」

シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」

シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」

シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」

シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」

シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」

シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」

シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」

シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」  
シゲ「おまえじゃ」

シゲ、紗矢を幹の中へ放り投げる。  
紗矢、叫びながら中へ落ちてゆく。

シゲ、大きく柏手を打つ。

幹が閉じ、揺れがびたりと止む。  
木の表面には、苦悶する紗矢の顔。  
幹からは樹液のように血がしたたり落ちる。

基紀と未来、恐怖のあまり声が出ない。  
正人、たまらず吐く。

シゲ「では、いよいよ、御神体様へ御献上じ

トク「祭りじゃ、祭りじゃ」  
せん「祭りじゃ、祭りじゃ」

きくの巫女鈴が鳴り続ける。

○ 加上村  
獣道を西崎と郁美が抜け出て来る。

郁美「あそこにながら歩く。」

西崎「ここは無人家があるわ」  
郁美「話が聞けるかも。行ってみましょう」

○ シゲの家 居間  
先ほどまでとは異なり、廃墟となってい

る。  
所々崩れており、蜘蛛の巣と埃まみれ。

西崎と郁美が入って来る。

西崎「縁側に2人の後ろ姿。」

近づくと、2つの骸骨が並んで座ってい

るのがわかる。

驚く西崎と郁美。  
額に飾られたシゲの息子の写真や村の集

西崎「おおい、あれを見ろ。まだ新しいぞ」  
基紀「うちのスーツケース。」

西崎「南部組の金だ」  
郁美「容疑者はどこに？」

○ 加上神社

きくが巫女鈴を鳴らし続けている。

シゲ「では、基紀を指差し、おまえから御神体

様に献上しよう」

ヒデ「なんじゃって？」

すぎ「あの子を献上するんですよ」

ヒデ「それはええの」

さち「ほんに、ほんに」

ノブとマツが基紀を一枚岩の上に仰向け

に寝させる。

シゲ「両手を抑えられて身動きがとれない。

せん「怖がらないでいい。痛くないからな」

シゲ「痛くない、痛くない」

基紀の腹が裂ける。軍刀を一振り。

基紀は苦悶の表情を浮かべるものの、痛

みはない。昨日のお神酒がよく効いておるのじゃ

すぎ「な、痛くないじゃろが」

トク「あれにはケシの成分がたっぷり入って

おるからもう」

ノブ「小刀を手にしたふみが基紀の腹から肝臓

を切り取る。御神体様

もお喜びじゃって」

ヒデ「なんじやって？」

ノブ「イキのいい肝臓じゃ、言うたんじゃ」

ヒデ「ほんまじゃ、ほんまじゃ。ワシも早う

食いたいわい」

ふみ「基紀の肝臓を器に盛る。

シゲ「基紀、それを見てショック死。

ノブとマツ、基紀を一枚岩から下ろす。

さち「男尊女卑は娘さんにはしようかいの」

正人「やめろよ！俺が代わりになるから、未

来「来は助けてやってくれよ！」



正人「俺、おまえのこと好きだったんだよ」  
未来「正人：私だって」  
正人「本当か！」  
未来「バカ。こんな時に嘘言うわけないでしょ」  
シゲ「助けるもなにもありやせんわい。二人とも御神体様に捧げるんじやからな」  
シゲがカカツと声をあげて笑うと、他の老人老婆も笑い出す。  
シゲ「愉快、愉快」  
すぎ「愉快、愉快」  
シゲ「しばらく笑いが続き、」  
シゲ「さて、御神体様をお待たせしてもいかな。次にかかるとするかのう」  
正人「未来！」  
未来「正人！」  
シゲ「こちら、大人しくせんか。斬り損なうじやろうが」  
シゲが軍刀を振り上げる。  
西崎「刀を下ろせ！」  
西崎「警察よ！」  
西崎と郁美が拳銃を構えている。  
ヒデ「なんじやって？」  
すぎ「警察ですって」  
ヒデ「なんと！特高のお出ましか。怖いもう」  
正人と未来、助かったという表情。  
シゲ、軍刀を下ろす。  
きく、巫女鈴を止める。  
正人「刑事さん！後ろ！」  
せんとさちが三八式歩兵銃の銃口を西崎と郁美の頭に突きつけている。  
ノブ「ばあさん、でかした」  
マツ「これぞ銃後の鏡じゃわい」  
せん「武装解除していただきましうか」  
さち「ほんに、ほんに」  
西崎と郁美、拳銃を捨てる。

○ 太平洋上空

米軍の戦闘機と輸送機が飛んでいる。

○ 加上神社

きくが巫女鈴を鳴らしている。

西崎と郁美も鎖でつながれている。

すぎが郁美のお腹を探り見ている。

西崎「いったいどうなっているんだ？」

郁美「あの老人たちは何者なの？」

正人「わかりません」

未来「私たち、生贄にされるんです」

西崎「生贄？」

正人「ほら、あれを」

西崎と郁美、顔面蒼白。

シゲ「驚かんでもええ。あなたはお供えには

とうが立ちすぎとる」

西崎、ホッとする。

シゲ「郁美、西崎に冷たい視線。

るかの」

西崎「案山子？ どういうことだ？」

ふみ「作物の代わりにカラスに食べられても

らうんですよ」

西崎「狂ってる：こいつら狂ってる：」

シゲ「なに？ 本当か？」

すぎ「うなずく。」

シゲ「あんた、妊娠しとるのか？」

郁美「それがあんたたちに関係あるの？」

西崎「墮ろしたんじゃなかったのか？」

郁美「あんたに責任とつてもらおうなんて思

ってないわよ。私一人で育てるつもりだっ

たのよ」

西崎「夢だ：なにもかもが悪い夢なんだ」

シゲ「では、そのお腹の子を献上させていた

だくとするかの」

郁美「嘘！ やだ！ やめて！ この子は助けて！」

ノブとマツ、郁美を一枚岩の上へ。

さちとせんが郁美の口にお神酒を注ぐ。

吐き出しながらも、胃に流し込まれる。

郁美、気を失い、ぐったりとなる。  
さちとせん、郁美の服を脱がせる。

シゲ「これぞ子宝じゃ」

せん「子宝、子宝」

さち「ほんに、ほんに」

シゲ「これで皇紀三千年に向けて、大日本帝国はますます繁栄じゃ！大日本帝国、ばんざーい」

シゲ「両手をあげて万歳。きく以外、手の空いている老人老婆も万歳し、」

シゲ「大日本帝国ばんざーい！」

シゲ「は、いたたくとするかの」

きく以外の老人老婆も柏手を打つ。

きくの巫女鈴が激しくなる。

シゲの柏手もさらに大きく。柏手を打ったたびに郁美の腹が膨らんでいく。

西崎「おい、嘘だろ」

正人「なんだよ、あれ」  
郁美のお腹が出産可能な状態まで膨らむ。

未来「やだ、あれなに？」

西崎「あれは：」  
郁美の股間から小さな手が出てくる。

正人「：なんだよ：あれ：」

シゲ「出た、柏手を続けながら、」

すぎ「出てこい、出てこい」

トク「出てこい、出てこい」  
柏手が止む。  
ワツと産声をあげる新生児。  
シゲ、軍刀でヘソの緒を切る。  
さちとせんが桶に入った水で新生児を洗

シゲ「見事なお供え物じゃて」

さち「ほんに、ほんに」

西崎「おまえら、その子をどうするつもりだ？」  
シゲ「御神体様がお求めになつておるのじゃ。肝を取り出したあとは、肉をワシらでいただくのじゃよ。こいつは美味そうじゃわい」  
さち「ほんに、ほんに」  
すぎ「祭りじゃ、祭りじゃ」  
マツ「祭りじゃ、祭りじゃ」  
正人「やめろ！そんなこと、安徳天皇が望んでいゝるわけないだろ！」  
シゲ「きくが巫女鈴をぴたりと止める。」  
シゲ「やめんか！それは忌み言葉じゃ！」  
正人「そんなこと知るか！安徳天皇も御神体も俺たちには関係ないんだ！」  
シゲ「御神木が風にざわめく。」  
シゲ「やめんか！崇られるぞ！」  
未来「あんたたちは安徳天皇を利用してるだけでしょ！崇られるのはあんたたちよ！」  
シゲ「御神体が光り出す。」  
シゲ「シゲ以外の老人老婆、恐れおののく。」  
シゲ「黙らんか！」  
軍刀を正人に振り下ろした。  
その瞬間、激しい爆発が神社を襲う。  
シゲの手から軍刀が落ちる。  
上空から米軍の戦闘機が空爆。  
神社だけでなく、加上島全体が空襲を受けている。  
西崎「あれ、米軍じゃないか？どうして？」  
シゲ「米軍だと！？敵襲！」  
また神社に爆撃。  
マツが爆風で吹き飛ばされる。  
腰についていた鎖の鍵が正人たちの前へ。  
正人「急いで鍵を外す。」  
ふみ「おじいさん！」  
ふみ「マツの死体に愕然と寄り添う。」  
シゲ「たち老人老婆、マツの死体を拝む。」  
ふみ「涙を拭い、竹槍を手に立ち上がる。」  
シゲ「空から空挺隊が降りて来る。」  
シゲ「いいか！今こそ大日本帝国臣民の誇り」

にかけて戦うときぞ！本土決戦じゃ！」

シゲ「鬼畜米英の首をとれ！」

きく「祭りじゃ、祭りじゃ」

トク「祭りじゃ、祭りじゃ」

ワ―ッと空挺部隊に挑み、神社を出て行くシゲたち。

シゲ、「我は海の子」を歌う。

正人「我は海の子、白波の♪」

未来「未来、逃げよう」

未来「あの子は？」

新生児、郁美の乳を吸っている。

新生児は生後半年ぐらいの乳児にまで成長している。

未来、乳児を抱きあげる。

乳児、泣き出す。

未来「お母さんとお別れしなさい」

乳児、泣き止み、手を振る。

西崎、一人で神社を出ようとしている。

正人「あんた！母親の同僚だろ！この子、見捨てるのかよ！」

西崎「そんなガキ知るか。それより金だ金」

正人「ケツ。欲ばりじいさんめ」

正人、郁美の拳銃を手に取る。

未来と乳児と神社を去る。

空爆。

御神体、吹っ飛ばされる。

御神木、炎上。

○

加山村

白兵戦。

シゲたち、米兵を撃ち落とす。

米兵も敗けず、シゲたちに応戦。

ヒデが頭を撃ち抜かれる。

すぎ「おじいさん！」

ヒデ「なんじやって？」

と、言い遺して絶命。

シゲたちは怯むことなく、立ち向かう。

せん「やっつとこの日が来ましたなあ」

さち「ほんに、ほんに」

○ 神社の外

白い煙が村を覆っている。  
咳き込む正人と未来。

未来「これ、ケシの煙よ」

慌てて乳児の口を覆う。

米兵が前に立ち、銃口を向ける。

正人、拳銃で頭を撃ち抜く。

米兵の銃弾が正人のももへ。

未来「正人！」

正人「大丈夫だ。行こう」

正人たち、逃げて行く。

○ シゲの家の居間

空爆で家に火が回っている。

西崎「金だ：金が入って来る。」

スーツケースを米兵が見つけ、開けよう

としている。

西崎、後ろから頭を撃ち抜く。

西崎、米兵を足蹴にし、スーツケースを

抱える。

西崎「俺のものだ：俺のものなんだ」

外へ出て行く。西崎を、別の部屋

にいた米兵が背後から乱射する。

勢いで、スーツケースが開き、札が飛び

出す。

札とともに西崎が炎に包まれる。

○

加上村  
ケシの煙まみれの中、戦闘状態。

米兵も中毒状態になっている。

仲間と撃ち合う者もいる。

米兵を殺す老人老婆。

しかし、その代償に倒れる者もいる。

一人、また一人と死んでゆく。

撃たれたきく、息絶えたまま日章旗を掲

げている。

最後の一人となったシゲ、米兵をまた一

人、銃剣で刺し殺す。  
シゲ「しかし、あつけなく頭を撃ち抜かれる。  
シゲ「両手をあげて万歳する。」  
シゲ「ばんざーい」  
万歳したまま絶命。

○ 加上村のはずれ  
空爆。  
未来「ダメよ！殺されるわ！」  
正人「バカ！あきらめるな！」  
未来「逃げるところなんてどこにもない！」  
正人「あそこだ！あそこなら！」  
未来「どこ？どこへ？」  
正人「洞窟だよ！」  
未来「御胎内のこと？」  
正人「あそこなら空爆だって耐えられるさ」  
未来「正人、頭いい」  
正人「正人、嬉しそう。」  
正人「さ、行こう」

○ 御胎内の前  
空爆が激しい。  
正人「正人たちが駆けて来る。」  
正人「早く！」  
正人「空爆で未来が吹き飛ばされる。」  
正人「未来！」  
未来「未来は乳児をかばって負傷する。」  
未来「正人：この子を！」  
正人「未来！」  
未来「この子を持って行って：私はもう……」  
正人「いやだよ！死なないでくれよ！」  
未来「正人ったら：バカね……！」  
未来「絶命する。」  
空爆はさらに激しく。  
正人、未来の頬にそっとキスをし、乳児を抱いて洞窟の中へ。

○ 御胎内の中  
正人が入って来る。

外はどんだん空爆が激しくなる。  
中は暗いが次第に目が慣れてくる。  
天井から吊るされたものを見て驚く正人。

正人「あれは：！」

正人「人間の死体がずらりと吊られている。」

正人「泰士の死体も吊るしてある。」

正人「：そうか！：ぜんぶ御神体のお供え物  
肝をとった死体をここで保存して、肉を  
少しずつ食べていたんだ：あの時、食べた  
肉は：ウエツ：」

正人、吐く。

空爆が洞窟の中をも振動させる。

天井が崩れ、かけらが落ちて来る。

正人、奥へ。

○ 御胎内の奥

海へとつながっている。

古い舟が一隻、砂利の上にある。

永楽寺の安徳天皇の絵と同じもの。

正人、乳児を舟に乗せ、舟を水の中へ押す。

すーっと進んでゆく舟。

正人、乗り込む。

乳児を寝かせ、櫂で舟をこぐ。

○ 洞窟の外

正人が乗った舟が出て来る。

脱出したところで、洞窟が天井から崩れ

る。

舟は波に乗り、加上島を離れてゆく。

空爆は激しく続いていく。

沈みゆく夕日を背に、舟は本土へ進んで

行く。

○

永楽寺のふもとの浜辺 夜

正人が乗った舟がたどり着く。

古代が迎え入れる。

正人「：この子をお願ひ：今にも死にそう。」



古代、乳児を抱きかかえる。  
正人、安心して息を引き取る。  
古代「安徳様のお帰りじゃ：」  
暗い海の中、加上島が赤々と燃えている。

○ 秋

○ 首相官邸

○ 客間

総理の北条（62）が米軍司令官のマックスの訪問を受けている。  
北条の後ろ姿は、マックスが料亭で会つていたスーツ姿の男と同じもの。  
マックス「あの時は北条総理のおかげで助かりました」

北条「いやいや。奥さんの弟さんの復讐にご協力できてなによりですよ」

マックス「おかしなものです。あの弟にはずっと手を焼かされていたのですが、あのようにな殺され方をしたとになると、感情に流されずにはいられませんでした」

北条「それが人間というものでしょう」  
マックス「ありがとうございます。そう言っていただけ

ると、救われる思いです」  
北条「いつもはこちらが救われていますからね。助け合いですよ」  
マックス「お礼と言つてはなんですが、あの島でうちの隊員が珍しいものを見つけたんですよ」

北条「マックス、箱を北条に差し出す。」  
マックス「ほう。これは？」

北条「北条、開ける。開けてみてください」

北条「これは素晴らしい」  
マックス「これは御神体のかけらが入っている。中には総理の趣味が鉱石だと伺っていた

ので、お気に召されるかと」  
北条「これはありますよ」  
部屋に飾らせてい

仮装した北条の孫たちが入って来る。

「おじいちゃん」

孫たちは、かぼちややドクロなどハロウ  
インの仮装をしている。

「トリック・オア・トリート」

北条「こちらから。お客様に失礼でしょ」

孫たち、ワーツと騒いで出て行く。

マックス「かわいいですね。お孫さんですか」

北条「ええ。いたずら好きで困ります」

マックス「日本人もハロウインを楽しむよう  
になっただけです」

北条「日本人は祭りが好きなんです」

マックス「そういえば、政治のことをまつり  
と言いますよね」

北条「古くは、まつりごとと言いました。私  
どもの国民は派手に騒ぐのが好きです」

ね。そろそろ私もドカンと盛大な祭りをや  
ってやりませう。カカカツ」

北条「高笑い」

うっすらと光を放つ御神体。

どこからか巫女鈴が聞こえてくる。

「続のお囃子」

シゲ「祭りじゃ、祭りじゃ」

きく「祭りじゃ、祭りじゃ」

祭りには終わらない。

【了】